

愛媛大学教育学部

第 131 号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail : dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀 春

元旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同



ご挨拶



愛媛大学
教育学部長
小助川 元太

小助川 元太

新年明けましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、日頃から愛媛大学教育学部に多大なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年四月に佐野栄前教育学部長より学部長職を引き継ぎました、小助川 元太（こすけがわ げんた）と申します。よろしくお願ひいたします。最初ですので、自己紹介と抱負を述べさせていただきます。

私は本学に着任して十一年になります。松山の温暖な気候や人々の温かさに加え、自分の専門である古典文学の研究をしながら十八年間の教員経験も活かすことのできる、私にとってはまさに理想的な環境であり、今でも愛媛大学教育学部に勤めることができて本当に良かったと思っております。

さて、これまでの十一年間を振り返ると、とくに印象深く、私自身を成長させてくれたと思われる

仕事は二つあります。一つは国際理解教育コースの主任・副主任として二つの海外研修の立ち上げに関わったこと、もう一つは附属中学校の校長としての仕事です。

着任した当初、教育学部にはいわゆるゼロ免課程があり、私は国語教育講座と同時に国際理解教育コースに配属されました。着任二年目にしてコース主任となったときに、コースの目玉としてワシントン大学バセル校での二週間の研修（UWB研修）を導入する話が持ち上がったため、主任として学生を引率して初めてアメリカに行くことになりました。また、その数年後には、長年にわたり教育学部と交流を続けてきた中国の遼寧師範学校を訪問する研修も立ち上げました。私がこれらの研修に関わってきたのは、国際理解教育コースの学生たちに、できるだけ海外体験をしてほしいという思いがあったからです。実際には行きがかり上引き受けざるを得なかったという事情もありました。正直なところ、英語が堪能なわけではなく、また、中国語に至っては全く話せないため、二つの研修の責任者としては適任とは言いがたかったのですが、私自身は新しい体験ができることに喜びを感じ、毎回楽しく仕事をさせてもらいました。おかげで専門分野では行く機会の少ない海外に毎年行く

ことができたばかりか、海外での人との出会いによって、ものの見方も大きく変わり、私自身成長することができました。

また、附属中学校の校長職については、昨年三月まで二期四年間務めておりました。これも、自分から進んでなりたいと思っとなったわけではなかったのですが、嫌々ながら引き受けたというのでは中学校の先生方や生徒たちに対して申し訳ないと考え、附属の先生方や生徒たちのために自分が最大限できることをやりながら、四年の任期を楽しむことに決めました。私がまず行ったことは、毎朝校門に立って生徒たちに挨拶をし、職員朝礼に顔を出すということでした。この毎朝の校門での挨拶と職員朝礼への出席を四年間ほぼ欠かさず続けた結果、生徒たちや先生方と親しくなることができ、最終的には附属中学校が自分の居場所になりました。また、学部と附属を繋ぐ教育連携コーディネーター会議の座長となり、持田の附属校園の研究部長を集めて話し合う場を作ったことがきっかけとなり、持田の附属四校園が校種を超えて連携する機会が増えました。今年度は新型コロナウイルスの関係で延期になってしまいました。また、来年度は百回目の研究大会を、四校園合同で開催することになっていきます。このように、附属中学校の校長を経験することで、中学校のみならず、他の学校種の教育現場の動向を知る機会を得ることができ、そこから多くのことを学ぶことができました。

この四月からは学部長という立場になりましたが、これも決して自ら望んだわけではありません。しかも、これまでの仕事とは比べものにならないほどの重圧を感じています。まずは学部長としてこ

なさなければならぬ仕事の種類の多さと量に驚きました。とくに、近年は国立大学改革が加速したことで、大学の予算や人員が削減されると同時に、地方国立大学の教育学部としての存在意義を示すことが強く求められるようになりました。加えて、就任早々、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大という、これまでに誰も経験したことがない状況のもと、難しい判断を迫られることもしばしばありました。そのため、この一年間は、これまでのように楽しく仕事ができたとはいえがたいのですが、せつかく与えていただいた機会です。この学部長という仕事をとおして、新たな出会いを楽しみながら、人間として成長したいと考えています。

現在愛媛大学教育学部の置かれている状況は、決して明るいものとはいえません。もともと厳しくいうと、愛媛大学そのものが地方国立大学としての生き残りをかけてさまざまな選択を迫られる時代に入っています。環境が悪くなることはあっても、良くなることはないでしょう。一方で、愛媛大学教育学部は豊富な人材と地域との緊密な連携によって、優秀な人材を輩出し、全国の教育学部・教育学部の中でも高く評価されてきました。愛媛県にとっては今後もなくしてはならない存在だと思っております。私は教員と学生が学ぶことの楽しさや喜びを分かち合えるような環境を守り、愛媛大学教育学部が地域に必要とされ、卒業生がいつまでも誇りに思える存在でありつづけるために、力を尽くしたいと思っております。未熟者ではありますが、同窓会の皆様方からもご支援をいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

目次

表紙

「月下美人」……………村上 朋子

題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫

「ご挨拶」……………(1)

愛媛大学教育学部長 小助川 元太

心 響……………(2)

「たくましく、しなやかに」

愛媛大学教育学部 附属幼稚園副園長

研究室紹介……………(3)

「社会科教育講座」

井上 昌善 研究室

職場だより……………(5)

「あたたかく優しく、幸せに」

四国中央市・新宮中教諭 加納 綾乃

「メッセージ」を通して

西条市・国安小教諭 田窪瀬里奈

「五年目」

久万高原町・父二峰小教諭 西山 裕司

「どの子どもとも星」

八幡浜市・松蔭小教諭 藏本 光紗

「喜びの音が聞こえる授業を」

宇和島市・天神小教諭 金子 舞

「出会いにありがとう」

愛南町・緑小教諭 新谷小百合

教育学部の今……………

「教育学部新入生の半期を振り返って」

特別支援教育コース 福岡 響

「大学生活を振り返って」

中等教育コース 村井 裕弥

たくましく、しなやかに



愛媛大学教育学部
附属幼稚園副園長

金築 治美

(昭六一卒)

新たな元号、「令和」の時代がスタートしてはや三年目の春を迎えようとしています。春……堅いつばみが一気に花開く季節の到来です。附属幼稚園の緋寒桜も一足早くピンクの顔をほころばせてみんなを迎えてくれています。

花といえば、「令和」に込められた手話表現を思い出します。「令和」を手話で表現するときには、つばみが開いて花が咲くように、合わせた指先をゆつくりと上に向けて開き、開いた手を前へ押し出すのだそうです。開いた花を前へと押し出すことで、未来へ向かって進んでいく、ということを表現しているとのこと。まさに、「今」を生きる子どもたち一人一人が、共に心を寄せ合い、互いに刺激し磨き合いながら、かけがえのない自分自身の花を咲かせ、来たるべき「未来」へ向かって進んでいく、そんな姿が目の前に広がってきます。

希望に満ちた新元号の幕開けでしたが、令和元年度の三月から新型コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休園という、これまで経験したことのない試練に直面することとなりました。分散登園を経て、待ちに待った通常登園が始まったのは、令和二年度の青葉の頃。登

園初日の子どもたちの、キラキラとした満面の笑みに胸が熱くなりました。改めて、かけがえのない子どもたち一人一人の命を守らねば！同時に、子どもたち一人一人の育ちをしっかりと保障しなくては！そんな思いを強くした登園初日でした。

しかしこの原稿を書いている今も終息とは言えないのが現状です。ただこの試練の中改めて子どもの持つ、たくましさやしなやかさを実感しました。私が耳にした子どもの言葉から紹介します。

『やつと会えたね、嬉しいな』
本園では、愛媛大学附属高校と連携し、毎年高校生との交流活動を行っています。一回目は六月の計画でしたが、実際に会うことはできません。そこで高校の協力のもと、リモート交流を試みました。画面に映る高校生が、手作りの絵カードを手に語りかけてくれます。こちら言葉返しながらの、画面上での対面。七月終わりには三密回避の中、念願の直接対面が実現しました。ある子の第一声「やつた、やつと会えたね」全身で嬉しさを表す子どもたち。

心響



リモートの交流が、実際に会えた喜びを倍増させた瞬間でした。

『好きな〇〇はなんですか？』

インタビューストをしてる子どもたち。先生や友達に、質問をして答えるというものです。好きな動物や好きな遊び……相手を知らうと、いろんな質問が出る中、

ある子が「はいっ」と手を挙げて元気よく「好きなマスクは何ですか？」と聞きました。子どもたちは「ぼくは、青いマスク」「私は、クロバーの模様のマスク」……今年、大流行しているアニメの市松模様も人気です。自分のお気に入りのマスクを熱心に話す子どもたち。夏に向け感染症と熱中症対策の狭間で、命を守るマスク装着について教職員で話し合いました。一方でマスクを自然に受け入れる子どもの姿に、心のたくましさを感じた一コマでした。

『元氣に来てもらわんと……』
季節は秋。附属校園全体が、すっかり秋色に染まります。イチヨウの黄色い葉、銀杏、松ぼっくり、ドングリ。こんな中にあっても自然は悠然と、命の営みを続け、秋の姿を見せてくれます。子どもたち、たくさん拾った秋のお宝を手に、さて何をしようか。ドングリ迷路にアクセサリー、秋の実満載キーキに、ドングリゴマ対決……自由な発想で友達と秋を楽しみます。「いらつしやい」年長児の熱心な呼び込みに誘われて訪れたドングリ転がしコーナー。入り口にはなんと「しようにくをし

てはいってください」の手書き文字が。お手製のフェイスシールドを付けてお客さんを待ち構えます。

す。待ち合い所には、ビニールテープで待合のレーンをつつ作って、並ぶ位置も示しています。理由を問うと、「だってみんな元気でいてもらわんと」幼児なりに事態を理解し、環境の変化を受け入れ、主体的に生活の中に取り入れようとしている姿がありました。

『もつとうまくなつたよ』
毎月、年長児が中心になって企画・運営している誕生日会。今年は、密を防ぎ分散形式で二回に分けて行います。したがって、出し物チームの年長児は二回、出し物をします。一回目が終わったと同時に何やら自分たちで集まって話し込んでいます。「この声が小さかったよ。次はもつと大きくしよう」……見ている人の反応をもとに、もつといいものにしようという真剣です。分散での会を、自己評価を生かして実践する機会にしている子どもたち。「一回目よりもつとよくなったよ」年長の教室には役目を終えて共に頑張った仲間を称え合う、ほっとしたひとときが広がっていました。

今回の学習指導要領改訂には、学んだことが生きる力となり今後の人生につながるしてほしい、どんなに予測困難な時代になっても自ら課題を見付け、学び、判断して行動し、幸せを実現してほしいという願いが込められています。これは今まさに私自身に向けられた課題だと感じています。子どもたちの笑顔の花を真ん中に、命を守り育ちを支える者として、変化を受け入れ、家庭・社会と共に、たくましく、しなやかに進んでいかねば、と思っています。

表紙によせて……………(12)

学部トピックス……………(13)

・新型コロナウィルス感染拡大期の授業について

・ナム・ウンギョンさんが論文コンクールにて最優秀賞を獲得しました

・聴覚障害学生の今

・瀬戸内海放送の番組でH16年院修了池田康弘先生&H30年学部卒鶴岡由子先生が登場しました

文芸……………(15)

俳句作りで変わったこと

句材の抽斗……………(16)

同窓会からのお知らせ

先輩を偲ぶ……………(17)

「あしあと(4)」

先輩たちのあしあと

同窓会事務局

会員の声……………(19)

「教行信証」と鈴木大拙

放送大学入学生募集のお知らせ……………(21)

愛媛大学ミュージアムから……………(22)

部活動紹介……………(23)

「愛媛大学俳句研究会」

校友会ニュース・会報送料……………(24)

敬 弔……………(24)

寄付者名・叙 勲……………(25)

裏表紙……………(25)

会員写真館

文芸欄

研究室紹介



愛媛大学教育学部

社会科学教育講座



講師 井上 昌善 先生

はじめに

私は、平成二十八年度に愛媛大学教育学部社会科学教育講座の教員に赴任しました。それ以前は、岡山県倉敷市の定時制高校の社会系教科科目の教員を一年間、神戸市の公立中学校の社会科の教員を八年間務めていました。中学・高等学校の教員生活では、知的に成長したいという子どもたちの思いに応える教科指導をどのようにすればよいか思い悩む日々が続きました。そのような日々を送る中でも、社会科授業作りに励もうと思えたのは、子どもたちの成長する姿があったからです。最初は、学習課

す。

私の研究分野について

私の研究分野は、社会科学教育学、特に社会科学授業開発に関する研究です。社会科学は、社会問題や課題を教材として取り扱い、その解決策について考えることを通して、公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す教科です。従来までの授業開発に着目した社会科学教育研究では、子どもたちに対して、日常生活では困難な質の高い知識を習得させることが「よい社会科学授業の条件」と見なされてきました。しかし、現代社会のあり様が急激に変化し、価値多元化が進行している今日において、単に質の高い知識の習得を目指すことのみを目標とするのではなく、社会問題や課題に対して公正に判断する力や社会に参画しようとする態度を含めた能力を育成することが重要であるという議論も展開されています。このような社会科学教育研究の動向をふまえ、私は次のような研究を行っています。

一つ目は、教師と子どもだけで

はなく、子ども同士や外部人材と子どもとの関係性に着目した議論する力の育成を目指す社会科学授業開発研究です。これまでの授業開発は、教師から子どもに対する指導の内容や方法に着目した研究が進められてきました。しかし、これからの社会科学授業は、子ども同士や外部人材と子どもの対話や討論を促す学習活動が重視されます。このような他者との対話や討論を含めた議論する力の育成を目指す社会科学授業開発に関する研究に取り組むことで、多様な価値観を認め、共生社会を実現する市民を育成するための授業構成の原理と方法を提案することを目指しています。

二つ目は、地域社会との連携方法に着目した主権者教育に関する研究です。学習指導要領が改訂され、社会に開かれた教育課程の実現を目指す教育活動の開発、実践が学校現場の課題となつています。外部人材を活用した授業など地域社会と学校の連携は、これまでも実施されてきました。従来と異なる点は、連携する際に、地域社会と学校が教育活動の目標を共

有するという点です。このことは、学校で取り組まれる教育活動の成果が、地域社会の課題解決に寄与することを想定した教育活動の開発、実践が重要であるということに意味しています。子どもたちを現代社会の課題解決の担い手である主権者として捉え、社会の形成のプロセスに参画させることを重視するための地域と学校の連携が要請されているのです。今後の研究では、特に、「なぜ、外部人材を活用しなければいけないのか」、「外部人材を活用する主権者教育だからこそ育成できる資質・能力とは何か」という点について検討していきたいと思えます。

社会科学教育講座の教員としての活動について

私が主に担当している学部の授業は、「社会科学教育法」です。本



社会科学教育法の授業の様子

授業は、教育学部だけではなく、法文学部の学生さんも多く履修しています。授業を実践するうえで、特にこだわっていることは、二つあります。一つ目は、学生さんが持っている社会科の教科観や指導法に対する考え方を相対化させ、自分自身の教科観を再構築させることです。そのために、社会科授業のよさの根拠について追究させ、その多様性について気付かせたり、模擬授業を実践するまでの教材研究のプロセスを振り返らせ、授業改善のポイントについて実感的に理解を促したりする指導を行っています。二つ目は、学生さん同士の意見交換及びデイスカッションを取り入れることです。異なる学部で学んでいる学生同士が社会科の授業について意見交換を行うことを通して、これまで気づいていなかった授業作りの視点や方法を共有することができま

す。近年では、「社会参画」、「持続可能な社会」をテーマに、資質・能力の育成を目指す社会科授業作りを行いました。また、平成三十九年度より公立小・中学校の先生方と外部人材を活用した社会科授業作りに取り組んでいます。具体的には、交通安全や防災に関する事象を教材化して、課題解決の担い手の育成を目指す授業開発、実践を行い、本授業実践の教育的効果の分析を行いました。

次に、松山市教育研修センターと連携した活動として、令和二年度より実施している「大学連携セミナー」（主権者教育研修会）を挙げるができます。本研修会では、小中高等学校だけではなくNPO法人など地域社会で取り組まれている主権者教育プログラムの実践を共有することを目的としています。主権者教育は、学校だけでなく、地域や家庭でも行うことができるものです。「社会に開かれた教育課程」の実現が叫ばれている今日において、NPO法人などの地域社会における主権者教育の取り組みの意義を明らかにして、学校現場の主権者教育と

の共通点や違いを明らかにしていきたいと思います。このように学校関係者や外部の専門家等が主権者教育の取り組みを共有することは、地域社会と学校の望ましい連携方法について検討することにつながり、主権者教育を推進することができると考えます。

最後に

大学の教員となり、現在卒業研究の指導をしています。本学部の学生さんは、自分で設定した研究テーマに対して、真摯に向き合い粘り強く研究活動に取り組むことができる方ばかりで、私自身大いに刺激を与えてもらっています。このような将来性豊かな学生さんに対して、学校現場で学び続ける教員として活躍するための素地を育成するための教育活動を引き続き実践していきたいと思っています。また、学校現場の先生方の社会科授業作りに関するサポートを行うためには、研究活動に精進する必要があります。地域社会と連携した主権者教育に関する研究を含め、今後も授業開発に関する研究活動を推進していきたいと考えています。

（参考）

シティズンシップラボのHPのQRコード



参加者同士の意見交換の様子



主権者教育研修会の講演の様子

職場だより



あたたかく優しく、

幸せに



四国中央市
新宮中教諭
加納 綾乃
(平三〇卒)

した。その中で、教員に必要な資質もたくさん教えていただきました。きつと私は、先生方のあたたかさ、生徒たちのきらきらとした姿に惹かれたのだと思います。

「四国中央市ってどんな所やろうね。四月からは社会人。少しだけ大人になったね。頑張っておいで。」教育事務所で内示をいただき、家に帰り着いたとき、母にはじめに言われた言葉でした。市内の学校のホームページを見てみると、どの学校にも生徒たちの元気な姿が載せられていました。このときの私は、これから始める新生活への期待に胸を躍らせつつも、どこか漠然とした不安を抱えていたことを覚えています。

私が教員を目指そうと思ったのは、大学時代に経験した愛媛大学附属中学校での教育実習がきっかけです。当時、まだ将来の目標が定まっていなかった私は、教育実習を何とかやり抜こうという気持ちが大きかったように思います。しかし、実習を進めていく中で、魅力的な先生方や生徒たちと出会い、教員を目指す上で必要な本気の五週間を過ごさせていただきました。

教員生活を始めて、もうすぐ三年が経とうとしています。この三年間で、私はたくさんの人々との出会いを経験しました。学校にあたたかく迎えてくださった先生方との出会い、元気で明るい生徒たちとの出会い、励まし合い、頑張る合える同期との出会い。そんなあたたかく優しい人々の支えの中で、私はこれまで頑張ってきたことができました。今、振り返って思うことは「四国中央市に來れてよかった」、そして「ありがとう」と思うことが多くなったということです。今日まで、右も左も分からないまま、学級経営や教科指導、部活動指導に取り組んできました。学校で子どもたちと授業をしたり、会話したりすることは毎日楽しいです。しかし、どうしようもなくしんどくて、不安なときも多くありました。そんなとき、私の周りには、いつもたくさんの方がいてくれました。優しく丁寧に指導してくださる先輩の先生方、「大丈夫？」と声をかけてくれる同僚の先生方、いつも明るく素直に頑張る生徒たち、話を聞いてくれる家族や友だち。日常には、たくさんさんの「ありがとう」がありました。

私は学級担任をするにあたって、「あたたかい学級（認め合い、伝え合い、助け合い、支え合い）」「この学級でよかったと、全員が心から思える学級」をつくりたいと考えています。そのために、昨年は「うそをつかない、ごまかさない。一生懸命頑張る人を尊敬し、自分も一生懸命頑張る人になる。感情的になったときには一呼吸おく。身体接触をしない。ありがとう、ごめんなさいを言う勇氣をもつ。」という五つの約束事をつくり、学級づくりを行ってきました。その中で、「あなたは、たった一秒の言葉にどんな想いを込めますか」と問い、生徒たちに伝えた一つの詩があります。

それは、小泉吉宏さんの「一秒の言葉」という詩です。この詩には、「たった一秒の言葉」に込められたあたたかい想いが綴られています。詩の中には、「はじめまして」「ありがとう」「がんばって」「おめでどう」「ごめんなさい」「さようなら」という短い言葉が出てきます。その一言で、勇氣が出たり、幸せになったり、悲しくなったりと、一言の大切さを感じられる詩でした。

私はこの詩を読んだとき、あたたかくてすてきな詩だと思い、学級の生徒たちにも伝えたいと思いました。「たった一秒の言葉」が、時に人の心や人生を幸せにしたり、その人の人生を良い方へ導いたりすることがあります。逆に、何気なく言ってしまった「たった一秒の言葉」が、自分の気付かな

いところで、身近な人の心を傷つけたら、だれかの人生を良くない方へ導いたりすることもあります。私は、言葉には良くも悪くも、大きな力があると思っています。どのような想いを込めて、どのような言葉を発するのかは自分次第です。そして、その言葉を一番よく聴いているのも、触れているのも、感じているのも自分自身です。だからこそ、一秒の言葉を大切にしながら生活していきたいと思ひ、生徒にもこの想いを伝えられたらと思っています。

また、授業を重ねる中で、授業の流れは準備物や指示の出し方で大きく変わることを実感しています。そして、私自身が自信をもち、笑顔で授業をするためには、日々の教材研究がとても大切であることを身に染みて感じています。新しい発見をしたとき、「分かった」「できた」という体験をしたとき、生徒はさらにさらした目をしていきます。生徒が自分の意見に自信をもてるような授業をしていくため、教材研究を重ねていきたいです。

昨年、総合的な学習の時間に、生徒たちと将来について考える機会がありました。その中で、「将来何になりたいか」ということは、「どのような仕事に就きたいか」ではなく「どのような生き方をしていきたいか」ということではないかと思うようになりました。私は、人は幸せになるために生きています。だからこそ、周りを見てあたたかく接し、人を幸せにすることができると生徒を育てていきたいです。

これまでたくさんの方々の支えの中で、頑張ることができました。以前、先輩の先生に「教員の仕事は、長い目で見たときに成果が表れることの方が多い。もしかしたら、数か月、一年経っても、どの対応がよかったか分からないかもしれない。だからこそ、今は目の前の生徒たちと出来ることをやっていくしかない。」と言っていたことがあります。今年は初めての異動を経験し、小規模校で勤務することとなりました。慣れないことも多く、周りの先生にご迷惑やご心配をおかけすることばかりですが、いつか一人前になって恩返しができるよう、一つ一つのことに丁寧に向き合っていきたいです。



「メッセージ」を通して



西条市

国安小教諭

田窪瀬里奈

(令二卒)

私が小学校教員を目指そうと思ったきっかけは、小学校教員である両親の影響です。両親の生活は多忙を極め、夜遅くに家に帰り、私を含めた姉弟の世話をした後に、授業に必要な道具を作ったり、休日に出勤したり、その間に習い事の送り迎えをするなど、いつ休んでいるのか不思議でした。また、運動会や持久走大会、参観日などの行事は被ることが多く、両親が来ることができたのは数回しかありません。最初は、両親が行事に來てくれる同級生が羨ましく、来ない自分の両親に不満があり、なぜそんなに頑張っているのか當時は分かりませんでした。しかし、両親は私に受け持っている子どもたちとのエピソードを聞かせてくれたり、子どもたちと遊ぶ機会を作ってくれたり、様々な経験をさせてくれました。

陸上記録会や水泳記録会では、両親が子どもたちから「田窪先生」と呼ばれている姿や、子どもたちを励ましている姿を見ました。子どもたちも「田窪先生の娘さんだ！」と声をかけてくれ、学校での両親の様子を教えてくれました。その時、初めて父が学校でギターやリコーダーを子どもたち

に披露していたことや、母がどのような言葉を子どもたちに伝えていたのかなど、教員としての両親を知ることができました。私は、教員としての両親を楽しそうに、笑顔で教えてくれる子どもたちを見て、両親が夜遅くに家に帰ることになっても、努力していた理由が分かったような気がしました。常に子どもたちのために努力を続ける両親の姿を見て、私も両親のような教員になりたいと思いました。

教員を志した私が、教えることの難しさや楽しさを学んだのは部活動でした。私は中等教育学校に入学してなぎなた部に入りました。二メートルを超えるなぎなたは、特有の構えや持替え技、体さばきや刃筋などがあり、どのようにならなければいいのか悩みました。教えようとしても上手く言葉にできず、ほとんど擬音語になつたり、「多分」という言葉が多く使ったり、教えることの難しさに直面しました。その中である先生が、「なぜこの動きをするのかを考えてみよう」と声をかけてくれました。私は、その言葉で「なぜその動きをしなければならぬのか」と前後の動きにも意識を向けることができました。一つの動きとして見るのではなく、繋がった動きとして理解しなければ、教えることはできないことに気がきました。それから、動きの前後の関係性を理解し、伝えることができるよう先輩方や先生方の教え方を注意深く聞き、後輩の動きをを細かく観察しました。すると、少しずつではありましたが、上手く言葉にして教えることができ、先輩の「できました!」という言葉と笑顔を見て、私もうれしくなり

ました。

その経験から、教えることの難しさだけではなく、教えることは楽しいと感じることができました。教員となった今でも「上手く伝えるためにはどうすればいいのか」を意識していますが、どれだけ準備をしても、授業中の発問や展開方法、電子黒板の使い方など、授業後に反省する点は多くあります。指導教員の先生や先輩の先生方の授業を参観したり、管理職の先生方に子どもたちの様子を相談したりしながら、少しずつ指導力を高めていきたいと思えます。

新型コロナウイルスの感染が日本でも広まったとニュースで知ったのは、教員採用試験も無事終えて、夢であった教員生活が始まるとワクワクしていた矢先のことでした。大学の卒業式も無くなり、不安の中、配属校が決定しました。四月になって、教室を整えたり、学級通信を作ったり、子どもたちに挨拶をしたり、担当学年が決まり、いよいよ授業が始まるかと思えば、新型コロナウイルスの影響で臨時休校となってしまう。休校中の宿題を準備したり、分散登校の準備や感染の予防対策を徹底したり、初任者研修がオンライン研修になったりと、新型コロナウイルスの影響によって、今までの当たり前が当たり前ではなくなる状況に、私はとても慌てていました。しかし、慌てている私に多くの先生方が優しく声をかけてくださり、「先生、何か手伝うことある？」と何度も力を貸してくださいました。先生方にとっても異例の事態である中で支えられ、一学期をやりきることができました。

ルスの影響も減少し、授業だけではなく、運動会練習や陸上練習など、行事に向けた準備が始まりました。しかし、一学期以上に目まぐるしい毎日に、余裕が無くなっていた私は、子どもたちの足りない部分に目がいき、常に子どもたちにもちに注意の言葉をかけていました。自分の心の余裕の無さに歯がゆい思いをしていたある日、先輩の先生が授業の様子を見てくたさぐさいきました。反省を頂こうと先生がいた教室に行くくと、黒板にはメッセージが書いてありました。内容は子どもたちがその日頑張っていたことや、先生からの言葉が書かれていました。先輩の先生にメッセージのことを聞くと、毎日子どもたちに向けたメッセージを書いていることを知りました。先輩の先生は、「子どもたちの良いところを見つけて、その時声をかけてあげることも大切だけど、後から伝えてあげることもできるよ」と教えてくださいました。私は、子どもたちの良さに気づき、言葉をかけることができなくなっていたことを反省し、子どもたちの様子



を見ることから始めました。改めて子どもたちの様子を見てみると、授業中常に手をまっすぐに出している子、休み時間友達がかけた時に真っ先に駆け付け声をかける子、給食当番を率先して変わってくれる子など、良いところが多く見つかりました。次の日の朝、電子黒板のメッセージに気付いた子どもたちから「なんで電子黒板にメッセージを書いたの?」と質問がありました。私は正直に、みんなの良さに気付かず、お礼の言葉を伝える回数が減っていたことや、文字で残したいという気持ちが伝わりました。最初は不思議がっていた子どもたちも、今では毎朝教室に入るとすぐにメッセージを読んでいます。中には「先生見ていたの!」と喜ぶ子どもや、「先生、ほくも手伝うよ!」と声をかけてくれる子どももいます。私もその場でお礼を伝えることを意識しながら、日々子どもたちの良い所や頑張っていることを見つけ、子どもたちへの思いと共にメッセージに残しています。

子どもたちにとって、メッセージに書かれている内容は当たり前のことかもしれませんが、しかし、当たり前が当たり前でなくなったり、今こそ、メッセージを通して、子どもたちが持つ良いところは当たり前ではないことに気付いて欲しいと思っています。そのメッセージは、子どもたちがいつでも見ることができるようファイルに収め、授業で活用することもあります。これからも子どもたちに心を向け、子どもたちの持つ良さを伸ばしたり、子どもたちの心の変化に気付けたりできる教員になれるよう、努力を続けていきたいと思っています。

五年目



久万高原町
父二峰小教諭
西山 裕司
(平二八卒)

今年で愛媛大学を卒業して、もう五年になる。その五年の間で、三つの市町、四つの小学校に勤務した。今更考えてみると、こんなに異動を繰り返している人もなかなかいないのではないかと思う。せっかくの機会なので、この五年間を簡単に振り返ってみる。

一年目。私は卒業してすぐ教員になれたわけではない。最初は講師として伊予市立北山崎小学校に赴任した。実習以外ほとんど現場を体験したことがなく、何をするにしても、「分からないことが分からない」という状態であった。このとき担任したのは五年生で、二クラスだった。学年主任の先生に教えていただいたことをなんとかこなしていくとすることが、うまくいかない。ふと気付いたら、自分の校務の提出物の締切りが間近！ 下手をすればその存在すら忘れかけているときもあった。しかもどういう順番で起案を回したらいいいのか、報告の順番はどういう順番が適切か、そんなことすらよく分かっていない！ 言い出しただけ切りがない。本当に当時の先生方には申し訳ない思いでいっぱい

いである。

当時の子どもたちに対して、自分の指導の方針が明確に定まっていなかった状態で指導していたように思う。しかし、子どもたちは自分のことを信頼してくれて、何事にも一生懸命取り組んでくれた。本当にありがたいことである。だからこそ、これではいけないと強く思った。反省だらけの一年目である。

二年目。採用試験に合格し、初任者として松山市立石井小学校に赴任した。教諭という立場になり、気持ち新たに頑張っていくことになったものである。だが、そんなうまくはいかなかった。日々の業務に加え、毎月のようにある初任者研修、所感文、e t c . . . 。自分の手際の悪さなどもあり、初任者指導の先生にも、本当に迷惑をおかけした。研究授業なども、同じ学年部の先生方にたくさんサポートをさせていただいたのに、それにきちんと報いることができなかったように思う。

当時担任したのは三年生。驚くほど素直な子どもたちだった。しかし、学年全体で見ると、精神的に幼い面もあり、けんかが起きたり、友達同士での小さなトラブルで言い争いになったりしたなんてことも。このときに、子どもと同じ目線で、同じ方向を向いて話すことの大切さが分かった。

三年目。石井小学校で二年目の勤務である。去年までの反省を生かして、できることを少しずつ増やしていくことができた。校内研などで授業をするも、まだまだ未熟。反省点は多々あった。

担任は四年生。昨年度からの持ち上がりである。子どもたちのことをよく知った上で教育活動を行うことができるありがたさがよく分かった。余裕も少しでき、出られるときは外に出て全力で遊び、過呼吸気味になり、チャイムが鳴ったら子どもたちとピロティに戻って掃除に行ったものだ。「全力」という言葉を学級目標に入れ、何事にも積極的に取り組んだ。その努力がよい結果につながればみんな喜び合い、悔しい結果に終わればみんな悔し涙もたくさん流した。運動会で優勝したときの感動は、今でも忘れられない。

四年目。久万高原町立柳谷小学校への赴任となった。「どこ？」と思う人もいるかもしれない（私がそうだった）。久万高原町の中でも、最も高知県に近い小学校である。当時の全校児童はなんと十名！ 石井小が九百名以上いたのに対して、約百分の一の児童数。学級は三・四年の複式学級。衝撃を通り越して、未知の世界に飛び込んだ気分だった。それに、そもそも交通手段が原付しかない！ いろいろな人にお世話になりつつ、まずは車の免許を取得。今まで経験したことがない、全校を動かす仕事も少しやらせていただいた。この一年は、自分の教員としての見識を大きく広げることができた、貴重な一年であった。

その貴重な一年の中でも、特に勉強になったことは、複式指導である。一時間の中で二学年分の内容を教えていくためには、まず各学年の子どもの学習の流れを作

る。そしてそれを基に、どちらの学年のどの場面でも教員が直接指導をする必要があるか、そして教員が直接指導できない間、子どもたちが自分で学習を進めさせるためにはどんな手立てが必要なのかということを考える。これらを日常的に行っていくうちに、子どもの力を信じていくことと、教員の支援が必要なこととの区別が明確になったように思う。

五年目（今）。久万高原町立父二峰小学校への赴任となった。同じ久万高原町内ではあるが、またしても一年での異動である。全校児童は十八名。学級は三・四年の複式学級。一年目以降全部三・四年生なので、もういつそ中学年のプロを目指すべきなのかと迷う。生徒指導主事など、経験したことのないような重要な校務が増え、より一層頑張らなければいけないが、毎日を過ごしている。

このように、わずか五年間で、様々な場所で様々な規模の学校を経験することができたのは、これからの教員生活にとって大きな財産であると思う。その地域ならではの特性や慣習。地域と学校のつながりの深さ。学校ごとの特色ある教育活動。研修等でよく見聞きするような言葉を実際に体験できたからだ。そして、子どもたちの本質はどこでも変わらないこともよく分かった。

また、これまでの経験を通して、自分の指導の芯を作ることができた。その芯は、

- 子どもの表情やつぶやきをきちんと汲み取ること。
- 指導をする際には、はっきりと伝えること。

「子どもだから」と思い込まずに、中에서도、特に意識をしたのは「子どもだから」と思い込まずに、きつとまだ分からない。このように考えるのはまさに「油断」であると思う。最近では、スマートフォンやタブレットの操作、SNSの利用などについては、大人よりも子どもの方が詳しい。都会だからではなく、山間部に住んでいる子どもでも、そんな知識を得ているか分からない今の社会では、「子どもだから」という思い込みは捨て、注意深く子どもたちを見守らなければいけないと思う。

これだけたくさんの経験ができて、まだ五年目。これからも更に見識を深め、自分の教員としての資質・能力の向上に努めていきたい。



☆ どの子どももは星 ☆



八幡浜市

松蔭小教諭

藏本 光紗

(平二三卒)

生まれ故郷である愛媛県での教員生活も三年目になりました。岡山県での勤務を合わせると、教員という職に就いて十年が過ぎようとしています。

この十年を振り返ると、たくさん子どもたちや先生方、保護者の方や地域の方との出会いがありました。そして、出会った方々から多くのことを教えていただき、支えてもらって過ごしてきた十年だったなと思います。そしてそれは今も変わらず、多くの方に助けられ支えられながらの毎日です。子どもたちと一緒に思いっきり笑い合える楽しいことや嬉しいこともたくさんあれば、つい言い過ぎて反省することや自分の指導は正しかったのか悩むこともたくさんあります。

山あり谷ありの毎日ですが、そんな教員生活を過ごす中でいつも心の片隅に留めている言葉があります。それは、表題にもした「どの子どももは星」という言葉です。この言葉は、大学時代の先輩に教えてもらった、教育学者東井

義男さんの教育信条であり、詩にもなっている言葉です。

『どの子どももは星』

みんなそれぞれがそれぞれの光をいただいて

まばたきしている

ほくの光を見てくださいますとまばたきしている

わたしの光も見てくださいますとまばたきしている

光を見てやろう

まばたきに促されてやろう

光を見てもらえないと子どもの星は光を消す

まばたきをやめる

まばたきをやめてしまおうとし

はじめている星はないか

光を消してしまおうとしている

星はないか

光を見てやろう

まばたきに促されてやろう

そして

やんちゃ者からはやんちゃ者の

光

おとなしい子からはおとなしい

子の光

気のはやい子からは気のはやい

子の光

ゆっくりやさんからはゆっくり

やさんの光

男の子からは男の子の光

女の子からは女の子の光

天いっぱい

子どもの星を

かがやかせよう

「東井義男詩集より」

この詩を教えてもらった当時はまだ大学生で、教員を目指す身と

して何となくいいなと思う程度でした。この言葉の意味を本気で考える様になったのは、実際に教員になってからです。採用試験に合格し、右も左も分からない慌ただしい毎日を過ごしていた中で、ふとこの詩を思い出し読み返してみることがありました。その時、「おとなしい子からはおとなしい子の光」という一文に、はっとさせられたのを今でも覚えています。

新採当時の私は、三年生の担任として三十二人の子どもたちを受け持っていました。忙しい時間の中で、できる限り子どもたちと向き合っているつもりでいたけれど、本当にできているのだろうかと考えさせられました。物静かな子や控えめな子と一日のうちでどれだけ会話できたのだろうか振り返ると、あいさつ程度でしか言葉を交わしていない子どももいることに気が付きました。積極的に話しかけてくれる子や活発な子とし

か関わっていない子も多かったのかもしれないと反省するきっかけにもなりました。大きな声で発言をしなくても、なかなか自分の意見が言えなくても、その子はその子なりに一生懸命考えて頑張っているのだということに改めて教えられた気がしました。

それからは、おとなしい子には自分から話しかけるようにしたり、休み時間等の余裕がある時に雑談したりする時間を大切にするようにしました。そうすると、今まで見えていなかった子どもの一

面が少しずつ見えるようになりました。また、学年団の先生や専科の先生など、クラスの子どもたちに関わって下さっている先生方に子ども様子を相談するようにしました。それぞれの先生方がそれぞれの視点で真剣に子どもたちを見て下さっていて、たくさんのおバイスや指導の仕方を教えて下さいました。先輩教員に相談する中で、「先生の言うことを聞く子だけが、いい子というわけではなくからね。」と言われたことがあります。様々な角度から子どもを見られるからこそ言葉だと思えました。中休みのちよっとした休憩時間や、放課後の職員室で子どもたちの話やクラスの相談をすることが当たり前になり、相談することの大切さも学びました。

毎日子どもたちと一緒に過ごしていると、楽しいこともたくさんありますが、そういう時ばかりではありません。自分に余裕がなかったり、思い通りに子どもたちが動いてくれなくてイライラしたりすることもあります。そんな時にこそ、この「どの子どももは星」という言葉を思い出すようにしています。教員になったばかりだったあの時の思いを忘れないように、教員としてしっかりと役目を果たしているのか自分に問いかける機会にしています。

今年度はコロナウイルス感染症の影響で、昨年度末からの急な休業、新学期に入ってもさらなる休業とこれまでにない生活を送って

います。そのような中で感じたのは、子どもたちがそこにいることの大きさです。休校中、子どもたちがいない学校はとても静かで、夏休みや冬休みとは違うさみしさを感じました。コロナ感染症の様子を見ながら設けられた登校日には、子どもたちの笑顔や明るい姿が教室に戻り、ただそこにいるだけでパワーをもらえました。

これからどうなるか分からない状況の中で、子どもたちも不安をかかえての生活だと思っています。そのような中でも元気で明るい笑顔をを見せてくれる子どもたちはひとりひとりどの子も星なのだと改めて感じています。これから先も、みんながそれぞれの光を輝かせられるよう、かわいい子どもたちと明日からまた頑張っていきたいと思っています。



喜びの声が 聞こえる授業を



宇和島市
天神小教諭
金子 舞
(平二六卒)

「教師は、授業が命。教師は、授業で勝負。」初任者時代の指導教員の先生からよく言われた言葉です。授業の質が上がると、子どもたちは、「学ぶ楽しさ」や「できる、分かる喜び」を実感することができるという恩師からの教えは、今も耳から離れません。学級には、国語が好きな子や算数が苦手な子、体育が好きな子、図工が苦手な子……、様々な子どもたちがいます。人間ならば、得意・不得意があるのは当然のことです。しかし、どの子どもも苦手だからと、はなから諦めてはいません。「できるようにしたい。」という思いを強くもっています。私は、子どもたちの前向きな思いを大切にして授業をつくっていききたいと日々励んでいます。子どもたちに「学ぶ楽しさ」や「できる、分かる喜び」を実感させるためには、教師の念入りの教材研究が欠かせません。そのことを私は、初任者時代に先生や子どもたちから教わりました。

話は、初任者時代に戻ります。教師生活初めての学級は、二年生三十五人。とても個性豊かで、か

わい子どもたちでした。しかし、毎日の五時間、六時間の授業準備をすることは想像以上に大変なものでした。指導書を片手ににらめっこしながら、とりあえず大学ノートに書き出して整理をしました。加えて、提示する物や教具の準備など盛りだくさんです。当時の準備というと、教材研究とは言えない一日一日をなんとかやり過ごすようなものでした。慣れない準備に、毎日遅くまで時間がかりました。授業準備をどのようにすればよいのか全くもって分かりませんでした。そんな状態では、到底前向きな気持ちで準備や授業をすることはできません。案の定、子どもたちの反応は今一つで、また落胆しての繰り返しでした。

思い切った隣のクラスの先生に相談をすると、「まずは、算数をいっしょに頑張ってみようよ。算数は、授業の流れがつかみやすいから。」と言って、教材研究ノートを開いて見せてくれました。子どもたちが使うものと同じノートで【問題】【つかむ】【課題】【考え】【まとめ】【振り返り】と授業の展開がまとめられていました。ノートの至るところに、問題提示や発問内容、ペアやグループ学習を取り入れるタイミングなど、細やかなメモがされていました。「こうやって教材研究しておくと、授業がしやすいよ。ノート指導もいっしょにできるし。うまくいった発問は、○を入れて、うまくいかなかった発問は、△を入れて改善すればいいしね。」聞いただけでは分からなかった教材研究の仕方が実際に先生の教材研究ノートを見せてもらったことで、イメージがつかめたのです。まさに「百聞は

一見に如かず」。ここから私も見様見真似で算数の教材研究ノートづくりをスタートさせました。やっとと明るい兆しが見えたのです。

先生は、私のことを思って、前日や前々日に必ず私の学級の一日の授業をしてくださいました。休み時間に黒板をのぞきに行ったり、子どもたちのノートを見せてもらったり、放課後には、どんな発問をしたか、子どもたちの反応はどうであったか、御自身の授業を踏まえてアドバイスをしてくださいました。先生はよく子どもたちに対して、前時と本時の違いを尋ねておられました。日頃からそのような見方を教わっている子どもたちは、前時のノートを見返し

ながら、多くの手が挙がります。「昨日は、合わせてのたし算だったけれど、今日は、違いはなので、ひき算へ変わっています。」「二桁―二桁の筆算から、三桁―二桁の筆算へ変わりました。」と子どもたちだけで違いに気付く、本時の学習のねらいとするところへたどり着いているのです。先生は、「子どもたち自身が発見させることが大切。何でもかんでも教えることが全てではないから。そのためには、教師が教材に関してよく理解しておくこと。念入りの教材研究が必要ってことだね。」またしても、先生から大切なことを教わりました。

あるとき、私が「先生は、算数のこと詳しいので、昔から好きなんですか。」と尋ねると、先生は、笑いながら「実は、この学校に赴任するまでは、算数は好きではなかったよ。でも、算数の研究校だったから、赴任を機に算数を勉強してみようと思って。教材研究をすればするほど、算数ってこんなに楽しいんだって思えるようになって。やっぱり教える側が楽しいって思ってた授業すると、子どもたちの反応は違う。何よりうれしいのは、算数って楽しい、算数が好きって言ってくれる子が増えたこと。」とおっしゃっていました。(今は、まだ算数が好きとは言えないけれど、先生のように熱心に教材研究をして、私も算数の楽しさを感じたい。そして、子どもたちに算数の楽しさを教えたいたい。)と思えたのです。先生の手厚いサポートの下で、だんだんと一人で授業を組み立てられるようになってきました。そして、算数には、毎時間新たな学びがあつて、楽しいなと感じるようになりました。うれしいことに、子どもたちもいろんな発見をしてくれるようになりました。授業に活気が出てきました。また、ノート指導にも力を注ぎ、ノート名人コーナーも設けました。

ようやく私も個々の子どもたちを見る余裕が生まれてきました。すると、【考え】のところで、正しい答えを導けない子や分からなくて手が止まっている子など、手立てが十分にできていなかったことに気付きました。(このままだといけない。三十五人全員でゴールしたい。)」Aさんは、ここでつまづいてしまおうから、その前にこんな補助発問を入れよう。」「Bさんは、いきなり立式だと難しいから、全体で図をかいいて確認してからにしよう。」「Cさんは、この図をまっさらな状態からかくと混乱するだろうな。数か所だけかき込むようにしよう。」など、受け持つ子どもたちの実態に合わせて手立てを考えました。そうやって、一つ一つ手立てを取り入れることで、算数を苦手としている子どもたちが「分かった。」と言って元氣よく挙手をしたり、「先生、できました。」とうれしそうにノートを見せてくれたりするようになりました。初めは、一部の子どもたちのための手立てと思っていました。が、授業を重ねる度に、どの子にとっても有効な手立てとして生きていくことに気付きました。

教員になって七年目を迎えた今も授業をする上で大切にしている二つのことがあります。①『教材のもつ魅力を理解した上で、楽しんで教えること。』②『目の前の子どもたちの実態を理解した上で、細やかな手立てを考えること。』今後子どもたちから「楽しかった!」「できた!」「分かった!」の喜びの声が聞こえる授業を目指して精進したいと思えます。



出会いにありがとう



愛南町

緑小教諭

新谷小百合

(平七卒)

教員となって二十五年の月日を経た。あつという間に過ぎてしまったように感じる。この教員生活の中で、私はたくさんの子どもたちに出会った。そして、その出会いに感謝している。

初任者で受け持ったのは、小学三年生三十五人。初めて自分の学級をもつという不安はあったが、同時に喜びも大きかった。一緒に過ごした子どもたちの名前は今でもはっきり覚えていて。そして、一緒に授業をし、活動をし、遊んだりしたこと、時には悩み、涙を流したりしたことすべての日々が私の宝物である。

この一年の最後の日、目の前の子どもたちが、自分の学級の子ではなくなるといってもさみしい思いがこみ上げていた。朝の会で一人一人の名前を呼ぶ時、ぐつとくるものを感じたが、どうにか名前を呼びきった。修了式を終え、子どもたちの前で私は、「この学級を受け持つことができて本当に」と言ったところで言葉に詰まってしまった。すると、子どもたちが「良かったです。」と続きを言ってくれた。その瞬間に涙が

あふれたことを今でも鮮明に思い出す。

初任者である一年は、何もかもが全力だった。そんな私を全身で受け止めてくれていた当時の三年生との出会いに感謝している。その子たちは、今立派な大人となっている。子どもたちの成長した姿を見ることがまた、今の楽しみの一つである。

教員生活三年目の時、転勤が決まり小規模校で勤務することになった。そこで、初めて音楽主任を任された。音楽主任になってすぐに考えたのが、町内音楽発表会のことであつた。愛南町で年に一度開かれる音楽発表会に向けて選曲し、子どもたちと共に合唱・合奏の練習をしていかなければならない。学級の音楽の授業をしたことしかない私には、学年の枠を越えた子どもたちと一緒に合唱・合奏を完成させることができるのだろうかという不安しかなかった。

合奏の練習には特に時間がなかった。まずは、個人練習である。楽譜が読めない児童の横に付き、一緒に歌いながら練習を何度も繰り返した。うまくできず、悔しくて涙が出る子もいた。それでも、一人ももう駄目だと投げ出す子はいなかった。また、同僚の先生方にもたくさん助けていただいた。私一人では乗り越えられなかったことも、子どもたちの努力や同僚の先生方のアドバイスによって何とか乗り越え、それぞれのパートを完成させた。しかし、本当の苦労はここからだった。「みんなで合わせる」ということが、これほどにも難しいことなのかと実感した瞬間でもあった。自分ができて、みんなと合わない曲にならない。そこに、合奏することの難しさがあり、また楽しさがある。(楽しさを感じることでできたのは、もともとつと後のことであるが……)

合奏を仕上げることに一生懸命だった。最後まで演奏することができた時には、子どもたちと一緒に喜び、自然と拍手がおこった。発表会当日、自分たちのステージを終えた時の、子どもたちの満足したような安心したような表情は忘れられない。一緒に音楽を作ることができた子どもたちに感謝である。

音楽には、人と人の気持ちをつなげ、人の心を動かす力がある。そう考え、子どもたちにそう伝えながら合唱・合奏指導をすることができるようになったのは、音楽主任という校務を数年続けて、少し余裕が持てるようになってからのことであつた。音楽主任という魅力ある校務を経験できたことに感謝している。

ある年、これまでに経験がなかった六年生の学級担任をするようになった。六年生といえば、学校を動かしていく機動力が求められる、最上級生としての自覚を持った行動がいたるところで求められる。そんな学年を持つことに、私は不安だった。学級開きでは、低学年とは違ったきりつと引き締まった表情、これから最高学年であることへの希望に満ちた表情の子どもたちに出会った。低学年を持つことが多かった私にとって、六年生の子どもたちとの時間はと

ても新鮮だった。六年生と一緒に学んだ。たくさんの下級生を動かすことの難しさも学びながら一つの学校行事を乗り越えた。

卒業式当日、初任者の時に感じた、この学級とも今日で最後という感情がまたわいてきた。朝少し遅れて登校する六年を一人一人迎えて入れた。しかし、私は、卒業式を控えていること、最後を立派に締めくくらなければという思いがあり、さみしさはまだ感じなかった。卒業式を終え、ほつとしてからの最後の学級活動。一人一人に卒業証書を手渡し、一言ずつ「言葉」を送った。そして、子どもたちに伝える最後の話。これです。何を言ったかあまり覚えてはいないが、言葉を詰まらせながらも「私にとって初めて送る卒業生があなたたちでよかったです。」と最後に子どもたちに伝えたことはしっかりと覚えていて。不安で始まったこの一年を、全力で乗り切り、そんな私を支えてくれた六年生との出会いに感謝の気持ちでいっぱいだった。

現在は、一・二年生の複式学級を担任している。二年生は昨年度に続いての担任となる。二年生は一年生を思いやり、一年生は二年生を見習いながら日々学校生活を送っている。

クラスの子どもの中に、「ありがとう」という言葉を自然に出せる子がいる。先生に教えてもらった時、助けてもらった時、アドバイスをもらった時に「ありがとう」。友達に、譲ってもらった時、教えてもらった時、助けてもら

た時、一緒に活動する時に「ありがとう」。こんなにも自然に「ありがとう」を言える子に出会ったのは初めてである。先日、人権・同和教育懇談会で聴いた講演の中で、こんな言葉があつた。「当たり前の反対は、ありがとうである。その子の顔が思い浮かんだ。私たちにとっては当たり前になっていることでも、その子は、その反対の「ありがとう」という気持ちで受け止めているのである。

教員二十五年にもなると、随分様々なことに慣れてくる。慣れれば慣れるほど、当たり前のもことも多くなってくる。私は、この子との出会いに「ありがとう」の気持ちでいっぱいである。当たり前になりすぎて忘れかけていた「ありがとう」の気持ちの受け止め方を思い出させてくれた。

これからも教員としての自分が続いていく。たくさんの子どもたちにも出会う。たくさん先生方にも出会う。忘れないでいたい。「ありがとう」の感謝の気持ちを。



教育学部の今

◇新人生の抱負

教育学部新人生の半期を振り返って

学校教育教員養成課程特別支援教育

福岡 響



愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育コース一回生 福岡響です。私の出身地は、阿波踊りやすだち等で有名な徳島県です。私の趣味は好きな音楽を聴くことと筋トレと野球です。野球は小学校五年生で聾学校から地元の小学校に転校した際に、地元の友だちに少年野球に誘われたことをきっかけに始めました。私は聴覚障害を持っており、左耳に人工内耳を装着しているため、最初は、自分の左耳にボールが当たったかどうかとボールに対する恐怖心や、守備での周囲の音が上手く聞き取れず、チームメイトと衝突することがありました。しかし、コーチや周りのチームメイトのサポートや自主練習の積み重ねによって、恐怖心や守備の乱れを克服することができ、その後も野球を続けることができ、現在も野

球部に所属しています。また愛媛大学生協学生委員会（GI）の共済部局にも所属しています。

私が愛媛大学教育学部を選んだ理由は、主に二つあります。一つ目は、愛媛大学では一回生から附属学校等での実習が充実しており、教育現場で生徒や授業の様子を観察し、様々な視点から学校教育に関する指導力を磨く体験的な学びができるということ、愛媛大学のホームページやパンフレットで知ったからです。二つ目は、高校二年生のオープンキャンパスに参加した際に、特別支援教育コースでは、聴力検査の機器や障がい疑似体験など、特別支援教育に関する、より実践的な力を養うための設備が充実しているという点に魅力を感じたからです。私は、小学校から現在に至るまで、聾学校と健常者が通う普通学級の

両方で教育を受けてきました。健常者と同じ環境で学ぶために苦労してきたことや、周りの人からのサポートによって、自分の障がいに対する課題を克服してきた経験があります。これらの経験を基に、他の障がいに対する知識を深め、将来教師となつて、多くの生徒を支えたいと考えています。小学校から高校まで様々な先生と出会い、優しく時には厳しく接してくださったことによって、私の人間性や学力などあらゆる面を向上できたため、私も同じように生徒に接したいと思い、教師を目指すきっかけになりました。前期の授業は、新型コロナウイルスの影響で、ほとんどの講義がオンライン授業という状況でした。 Moodle や修学支援システムにおいて、授業の資料や動画を視聴した上で、提出物を出す形式、あるいは Zoom や Microsoft Teams などで同期型でのオンライン授業を受ける形式でした。 Moodle から提出物を出す際に、期限を守って正確に提出したつもりでも、コロナウイルスの影響で、大学で講義を受けるのではなく、オンラインで学習をする状況であり、実際に講義の先生と対面で話す機会がなく、授業の内容や提出物に関する質問はメールでしか聞くことができな

ないため、自分は正確に提出できているだろうかという不安な気持ちがとても大きかったです。また、履修ステーションなどイベントが次々と中止になったという不安や、初めて履修登録をする際に、この履修登録で本当に大丈夫だろうかという不安、同じ学部で友だちができるだろうかという不安もありました。スーツを着て入学式に参加することや大学での対面授業を受けることをとても楽しみにしていましたが、入学式が中止になってしまい、前期の一クォーターではすべてがオンライン授業で、キャンパス内に入れないという状況だったため、シヨックな気持ちもありました。しかしSNSで同じ学部の人との繋がりができたことや、Zoom オンライン交流会というイベントに参加し、多くの同回生や先輩と話ができただけによって、コロナウイルスの状況下にも関わらず、教育学部だけでなく様々な学部の友だちが多くでき、とても安心しました。同じ学科の先輩に、この講義の内容はどのような内容だったのか、この講義での試験勉強ではどのようなことをしたのかなどを質問したり、同回生の友だちと一緒に履修登録で自分が受ける科目を確認し合い、履修する科目について相談したりした際に、大学生活を送る上で、大学の友だちや先輩との繋

がりはとても大事だと実感しました。これからも大学での仲間を増やしながらかその繋がりを大事にしていきたいと思いました。

後期の第三クォーターは遠隔講義を積極的に行いつつ、感染防御対策を徹底しながら対面授業も可能な限り開講する方針だと発表されました。前期の授業では対面授業の機会がほとんどなかったため、大学での対面授業の雰囲気や内容に少しずつ慣れていきたいです。これから教育に関する専門的な内容を学ぶ機会が増えるため、教育に関する専門的な知識をしっかりと深め、様々な教育活動や実習を通して教育現場での実践力を身につけていきたいと考えています。また、副免許の取得にもチャレンジし、副免許の教科に関する内容を自主的に学び、教育に関する資料や書籍を自主的に読む習慣をつけていきたいです。そして障がいの有無に関係なく、すべての生徒にとって効果的で分かりやすい授業を常に追求し続け、生徒の個性を引き出し、共に成長できる教師を目指したいと考えています。愛媛大学の学生全員が大学キャンパスですべての対面授業を受けることができる日を楽しみにしています。新型コロナウイルスの一刻も早い収束を願っています。

◇四回生の想い

大学生活を振り返って

中等教育コース国語教育専攻

村井 裕弥



アツという間に四回生になってしまい、二十二歳にして初めて「光陰矢の如し」が実感を伴ったように思います。これまでの学生生活を振り返ってみると、楽しい思い出がいくつもありました。

一回生の頃は、毎日一限に共通教育の授業があり、眠い目をこすりながら必死に講義を受けていました。講義を受けた後は右も左もわからないままレポートや、課題に取り組んだりしていたように思います。なんとか友人には恵まれたので、講義が終われば友人とえみか（大学構内のショップ）に行ってお菓子や唐揚げを買って食べたり、他愛のない話をひたすらにしたりしていました。二回生になっても休み時間の行動はほとんど変わりませんが、講義は

少しずつ専門的になりました。それに伴って課題の難易度が格段に上がり、ウンウン言いながら取り組みました。ですが、講義の内容が面白いので大学に行くことがほとんど楽しくなったように記憶しています。そして、長期休業になれば友達と沖縄や、四国一周旅行等を計画し、長い休日を満喫しました。三回生では附属校園で実習をしました。いくらかの不安と期待を胸に実習に行き、生徒の前に授業をしたのはとても鮮烈に記憶に残っています（授業はどれも大失敗でした）。どれもつい数日前のこのように思い出され、楽しい記憶ばかりです。

このような楽しい生活がこのままずっと続くと思っていたら、四回生になって劇変してしまいました。

た。新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって世界が一変し、大学生活もすっかり変わってしまいました。学生の登校禁止によって講義室に学生が集まって講義を受けることが無くなり、オンライン会議アプリを使用しての講義になりました。そのため、休みに友達とお菓子を買い食いしたり、他愛のない話をひたすらにしたりするような日常は非日常となっていました。長期休業中は自粛を合言葉に外出が憚られていたために旅行などは言語道断という状況です。実習についてもかなり変わってしまいました。幸いにも受け入れはしていただけでしたが、子ども先生も実習生もマスクを着用しての生活のため、なかなか顔と名前が一致せず、うまくコミュニケーションが取れないような状況。授業にしてもこれまでは気にも留めなかったようなベアワークやグループワーク、教具の共有の制限にも気を遣わなければなりません。大学はどこよりも厳しい状況で入れませんでした。

が、生徒が登校している公立の小・中学校もとても大変そうでした。しかしながら、後期に入り、少しずつ状況が落ち着き始め、これまで当たり前だった対面式授業（このような呼び方さえしなかったのに！）も許可が得られれば実施できるようになり、大学にも学生が徐々に戻ってきています。

現在、世界は失われた時間を急速に取り戻すかのように元の日常に戻るように動き出そうとしています。しかし、そう簡単には戻れないのかもしれない。だからこそ、これまでの日常に戻すのではなく、これからの日常を模索していくことが大切のように思われます。牟礼慶子さんの詩に「見えなだけで」という作品があります。その詩の結びは「あんなに確かに在るものが／まだここからは見えないだけ」となっています。日常も、大学生活の新たな形も確かに在るのだと思います。それがいち早く見えるようになることを願っています。

表紙によせて



村上 朋子

(昭三九卒)

これは、月下美人の花です。もう二十年以上にもなるでしょう。我が家の庭に咲き始めて……。一夜限りの月下美人は、美しい花を咲かせることで知られる多肉植物です。濃厚な香り、妖艶な花が特徴で夜咲き始めて朝になるとすっかり萎んでしまう様子は、まさに美人薄命の言葉そのものです。花言葉も「儂い美」「儂い恋」「艶やかな美人」です。神秘的な魅力で、熱心な愛好家も多いんだとか。六〇八月頃に咲いて、株の体力が充分回復すれば十月頃もう一回咲きます。咲いているのを見たことのない友のため、真夜中十二時頃庭に出て撮りました。思いがけなく歴史と伝統のある同窓会報の表紙に……、びっくり仰天です。でもこうして出来上がってみると、記念になりました。素敵な年になりそうです。

私たち三九卒はサンキュウ会（三九会）と称し、時々集まっています。でも、昨年はコロナ禍のため集まれませんでした。このかつて経験したことのないコロナ禍の中、ウイルスの正体を人間の知恵と英知で必ず克服してコロナと共に生きていく日が一日もはやからんことを祈ります。

学部トピックス

◆聴言コース

◆新型コロナウイルス感染拡大期の授業について

令和二年度は新型コロナウイルス感染と共に始まりました。入学式がない新入生は、四月二十八日まで授業もなく、新入生同士が会うことができない時間が続きました。前期は、大学の授業は、Moodleという蓄積型授業（インターネットを使用して、愛媛大学のサーバーにUPされた授業の動画や教材を見て、自宅で勉強し、課題を提出する）と、ZoomやTeamsという遠隔授業（WEBカメラを使用して、教員による授業を受ける）で実施されています。しかし、一部の実習や実技を含む授業については、感染防止策を講



1 回生対象、手話コミュニケーション論の授業は全員フェースガード



聴力検査実習はフェースガード必着



山内望先生お手製フェースガード

じることを条件に、六月十一日から、対面型授業が行えるようになりました。

特別支援教育コースの一回生の「手話コミュニケーション論」、二回生の「聴覚障害児の生理と病理」の検査実習については、対面

型授業で行うことが認められました。これらの授業では、マスクはもちろん、フェースガードを付けることや、入退出の際の手指の消毒、机や使用物品の消毒を行っています。なんと、「手話コミュニケーション論」では、学生用のフェースガードが対面型授業の開始日に全員分が揃えられず、急遽、講師の山内望先生設計のお手製フェースガードを用いての対面型授業実施となりました。それまでは、ビデオで手話による自己紹介などをやっていましたが、手話には奥行きがありますので、どう

してもおかしな手話しか伝えられず、対面型授業が再開でき、本当に良かったと思っています。

七月六日(月)からは、大学全体の警戒レベルが「ライトイエロー」となり、一部の緩和が行われることになりましたが、前期は、すべて、遠隔授業を継続することになりました（一部の試験や集中講義を除く）。やむを得ないこととは思いますが、新入生は入学式がなく、それに続く、サークル勧誘（勧誘ビラの春の風）もなく、寂しいスタートとなっていました。新型コロナウイルス感染が早

く完全に収束し、後期からは通常の授業が行えるようになることを祈っています。

なお、愛媛大学としては、校友会・愛媛大学基金を用いて、アルバイト収入が減って生活が困難になった学生に対し、一人三万円の給付を行いました。四～六月は、飲食店等の休業が相次ぎ、アルバイト収入が得られなくなった学生が多くいたと思います。僅かであれ、政府からの定額給付金に合わせ、大学独自の助成策も行われました。

◆ナム・ウンギョンさんが論文コンクール にて最優秀賞を獲得しました



補聴器メーカーであるオーティコン社主催の「ヒアリングケア論文コンクール二〇二〇」にて、愛

媛大学教育学研究科特別支援教育学専攻二年生ナム・ウンギョンさん（留学生）（指導教員 立入 哉）が、英語論文枠で、最優秀賞を獲得しました!!

ナムさんは二〇一六年に愛媛大学教育学部と韓国・順天郷大学の交換留学生として、一年間愛媛大学で学びました。留学後、韓国の大学に戻り、卒業後、二〇一九年四月から愛媛大学の大学院で学んで

います。

ナムさんの論文は、ヒアリングケアに関する世界各国の調査結果を参照しながら、日本における課題を挙げ、それを解消するための方策を提案した内容でした。最優秀賞の賞品は、本当はデンマークで開催される国際サマーキャンプに参加するための往復航空券とサマーキャンプ参加費用だったのですが、今年は、新型コロナウイルス感染症予防対策として、デンマークでのキャンプが中止となつてしまい、十五万円分の旅行券+副賞となつてしまいました。

◆聴覚障害学生の今

特別支援教育コースには、聴覚障害学生が多く学んでいます。補聴器や人工内耳を使用している聴覚障害学生は、令和二年度は四回生に一名、三回生に一名、二回生に一名、一回生に三名、院生に一名と、計七名が在籍しています。最近では、遠隔での文字通訳が一般的です。遠隔文字情報補償とは、授業の教員が胸にマイクを装着し、そのマイクの音を離れた場所

にいる文字通訳者が聞き、聴覚障害学生が持っているタブレットに文字として送る方法です。すべてネット回線を通じた通信で行うので、文字通訳者は教室にいない必要はありません。さて、そうした聴覚障害学生ですが、過去のデータを見直してみました。

学部を平成十年〜三十年に卒業した聴覚障害学生は九名いました。うち八名が元を含めて聾学校

教員を務めていました。このうち、現在も聾学校教員として勤務している卒業生は、六名と高い率で聾学校教員現職です。

一方、大学院・専攻科を平成十年〜三十年に修了した聴覚障害学生は十名で、うち八名が元を含めて聾学校教員を務めていました。このうち、現在も六名と高い率で現役で聾学校教員の現職です。



遠隔文字情報補償（iPadの画面）

◆瀬戸内海放送の番組で H16年院修了池田康弘先生 & H30年学部卒鶴旨由子先生が 登場しました



コロナウィルス感染防止のため、聾学校ではフェースシールドの使用が盛んです。マスクをしないと、口の動きが見えにくくなってしまうからです。各地での取り組みがニュース映像として、放送されていますが、六月十日、瀬戸内海放送のニュースにて、岡山聾学校の様子が報道され、二名の愛大卒業生・修了生が登場しました。

<http://www.ksb.co.jp/sp/newsweb/detail/17611>（会報送付時には見られなくなっているかも知れません）

文 芸

俳句作りで変わったこと

住本 満磨

(昭五〇卒)

はや、句作りを始めて十年が過ぎてしまった。

まず変わったこと。もの・ひとへの関わり方がより積極的になった。ものでは、今年の竹が部屋からぼうと見える。気になるのそこに行ってみた。すると竹の周りにはべっとり白い粉が付着。次に人。わが町では田植えが済んだ後、希望者は温泉に行く習慣、つまり泥落としがある。先輩から早苗饗(さなぶり)の季語を教えて頂いた。◆早苗饗や湯につかりたる顔と顔◆を作り終え、仲間の言葉には宝があるぞ、と気づいた。その後仲間への声掛けを進んで始めている。

二つ目は言葉を敏感に捉え物事を深く考えられるようになった。分かりやすく面白い句か、季語の意味が生きているか、適当な言葉は他にないか、などを考えている。

三つ目。会員の意見をより真剣に聴くようになった。その意見をもとに句を推敲したところ、何度

も新聞の俳壇に入選したのだ。今後は俳壇賞の三席や二席に入る回数を増やしていきたい。さらに健康寿命を延ばし、俳句作りを楽しんでいきたい。

初句会師の推薦の一句かな
暖房車さつと乗り込む園児かな
卒業や歌の包める嗚咽の子
長閑さや野良で寝そべる子等の声
桃の花添へて見舞ひを手渡しぬ
春風や紙鉄砲の響く音
湧き水に向かひて泳ぐウグイかな
畔焼きや薄き葉の炭捻り有り
城郭に苦むす岩やしだれ梅
釣り竿に鎌を付けをり和布採り



ひめだかの孵化を見詰める幼かな
堰止めに集まる農夫夏の空
初夏や木漏れ日に舞ふ青き風
歌舞伎面被るがとき雨蛙
花合歓を飾りとしたる女の子
園児らの鼠火火に身構へて
水眼鏡より見る鮎の太きこと
蛭籠両手で覆ひ緑い国

初めてと言ふ孫連れて蛭狩
夏めくや半袖シャツの女高生
軽鴨の子の母に続き潜りけり
稚児の如白粉厚き今年竹
朝まだき庭で尾を振る石叩き
泥の田を呆然と見る野分後
竹筒の灯りに浮かぶ月今宵
山間の一番星や稲車
土砂被るままに南瓜の太りをり
踊り子の一瞬止まる手先かな
案山子面怒れる父を描きたる
酔ひ客の道を塞ぐや秋祭り

秋風や闇の向ふの人の影
蓮の実や御伽の国の小人達
月光の闇を払ひて海は白
大空を掴んで揺れる南瓜蔓
流星や漁火灯し網を引く
新じやがのゴロゴロと出る鍬の先
眠り込む法座の席や秋彼岸
猪肉や盛皿に置く具たくさん
三毛猫の毛のつやつやと冬に入る
寒牡丹こもに巻かれて凜と咲く
崖上に慰霊碑建つや寒昂
立山の稜線浮かぶ冬霞
冴ゆる夜や汽笛山より細長く
駛や田を鋤き終へて風呂の中
谷間の小さき学校暮早し
竹馬の風切り宙を闊歩かな
立冬や薪の重なり軒に着く
凍星や合唱終へて帰り道
冬耕や走る球児の声一つ
ひらがなを探す園児の歌留多会

句材の抽斗

谷井 紀夫

(昭五〇卒)

学生時代には同期の友と俳句についてなど全く話すことがなかったのに、今はこうして住本君(この号に並んで載っている)と俳句のやりとりができるようになった。ほぼほぼ満足できた句を句材の抽斗ごとに紹介したい。

■自分史モノ

ほとんどの句が自分史を刻んではいるのだが、作品としての評価は気にせず、自分史に刻んでおきたいと詠んだ句。

母子草咲くや三十三回忌

母が亡くなった時、母逝けり引き残しおく母子草、と詠んだ。初七日が過ぎ自宅周りの草引きをしていた時、母子草だけは引き抜くことができなかった。あれから時は流れて三十三回忌。弔い上げである。「母子草」と「三十三回忌」を使って一句詠みたいと思ったのだが、あと三文字しか入れられない。やつと「咲くや」が思い付いた時は、まるでジグソーパズルの最後のかけらが収まったようで心

地良かった。

草焼くや風の形に舞ふ煙

お城下育ちの私が近郊農村に住むようになって三十余年。農業のことも全く知らない上に人間関係も十分でないのに総代を引き受けるを得なくなった。人生初の土手草焼き。当日は「去年通りに」と言えば済むのだが、準備が大変。火が消えているかどうか夜に一人で見回った時のしじまの中の深い闇。祖父母の元で過ごした子ども頃の田舎道を思い出し、ある種新鮮だった。

旧友より恙なしやと今年米

住本君から新米が届いた。台風接近のニュースを聞き、今回は八月末に稲刈りをしたのだとか。前回台風で稲がほとんど倒れてしまい、四、五株ごと紐で結んで立てたという。暑い中での大変な作業だが、水に浸かったままでは五日もすれば穂の状態で根が出て商品にならないらしい。そんな米作りの苦労を全く知らずに新米をいただくなんて、よくく噛みしめて味わわないと申し訳ない。

■昭和モノ

句材に困った時には子どもの頃を思い出して詠む。

割れ易き七福煎餅花の冷

七福神の顔や米俵、宝船などの形をしたあの安くて薄い煎餅。型からはみ出したパリパリな部分をかじると得した気分になる。子どもの頃には街に一軒は手焼きの煎餅屋があったのに、最後の一軒だった西一万のマリヤ製菓が令和元年七月に閉店。

青写真真時空を超えて飛ぶアトム

青写真は日光写真のこと。赤胴鈴之助、鉄人二十八号、月光仮面、鉄腕アトム……。白黒テレビに見入っていたあの頃。日光写真にもそういうヒーローがよく登場した。アトムは今も心の空を飛んでいる。

■インタビュースもの

俳句社「泉」に属している私は、「誌友インタビュース」を連載して、毎回刺激をいただいた。
菟藟の花男にもある悪阻

小田の立石のTさんにインタビュースさせていただいてから毎年訪ねていて、何かとご馳走になっている。手作り菟藟も美味しくて、菟藟で詠めないものかと考えた句。めったに咲かない菟藟の花。特有の臭いがあるらしい。そういえば妻が懐妊かという時に私も

悪阻状態になったなあと思い出した時、これだつ、とほくそ笑んだ。座りの悪さも不快感を出していると自分では思っている。

敗戦忌老翁直立不動なり

今は亡き松山市内のMさんに戦争体験を伺った後、車で去ろうとしたら、バックミラーに見送つてくださる姿が。しかも直立不動。ああ、こんなふうには兵士として生きてきたんだ、体がいつまでも戦争を覚えてるんだと、胸が痛かった。忘れられないシーン。

■歌モノ

句材に困ると、好きな歌からインスパイアされたものを詠むことも多い。

林檎狩りんご追分口遊び

言うまでもなく美空ひばりの名曲。現在非常勤講師として山の高校に勤めていて、一緒に林檎狩りに行った。花摘みのお手伝いをしたお礼に招待されたのだが、それに便乗させてもらった。たわわに実った林檎。ふと「りんご追分」を口遊んでいた。もちろん高校生はまったく知らない歌。それどころか、引率の先生も知らないという。私もリアルタイムでは聞いていないが、世代差に愕然。後日「追

分」の意味を問題に出すと、「先生、ツイブンってなんですか」と。ますます愕然としてしまった。

Uターンして十年余大根引く

太田裕美の「木綿のハンカチーフ」がヒントとなった句。私はUターンに無縁だが、都会が魅力的でもう田舎には帰れないと言うあの歌の中の男がその先どうなるんだろうと勝手に想像してできた句。

■孫モノ

長崎に住んでいる娘の夫が東京本社で半年間の研修となり、単身赴任。幼子をかかえての暮らしは大変だろうからと里帰りさせた。半年間の孫のいる生活。

抱く嬰の指さす飛機や秋高し

歩き初む幼と手折る赤まんま
立冬や長湯嫌ひの児と長湯

禁断の孫俳句。あるブログによれば、「孫、は蠅取り紙みたいだねちやねちやしている。べたべたしたものから火花は起こらない。孫という言葉自体がかわいいという感情で飽和している」と。分かっているのに詠んでしまう。過ぎ去った半年を想うと、なんともいとおしい。貴重な時間であった。

同窓会からの お知らせ

令和二年度の同窓会関連事業は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い予定していた多くの事業が中止になりました。また、会議につきましても支部長や理事の感染リスクを避け、大学の警戒レベルに従って書面での決済に変更してきました。そうした状況にもかかわらず会員の皆様のご支援ご協力により会報一三一号が発行できましたこと編集委員一同心よりお礼申し上げます。

今後ともご支援ご協力をお願い申し上げます。

【お願い】

俳句・川柳・絵手紙・絵画・スケッチ等を楽しまれている会員をご紹介ください。

また、山登りや旅行の際に撮った風景や珍しい写真、地域の名所（花の名所・滝・祭り・建物等）を写した写真等も募集しております。写真はプリント写真で一枚でも構いません。ぜひ、ご投稿ください。



先輩を偲ぶ

あしあと (4)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より抜粋)

同窓会事務局

七十年昔のこと

愛媛県師範学校

高橋 イク氏 寄稿

(明治四一年卒)

入学は明治三十八年で七十年余の昔、日露戦争の最中でした。夜明け前、町に整列して松山連隊の出征を見送って、がいせを祈ったこともありました。

まず、入学当日の夕食は歓迎会でありました。その時、上級生の皆さんは今年は女子部の大改革で明るい光がさしたようなと、よろこんでおられました。という事は、開校以来前年度までは女子部学生の頭髮は、桃割れとも新蝶々ともつかぬまげの日本髪であったのが、待望の束髪、すなわち其の時の通称ハイカラになったのと、着物の袖が筒袖になって、白だす

から聞こえるラッパのチイ……
テエ……タア……の音が淋しくて涙が出てくるし、城山のカラスがなければ幼いころ口にしていた雀は「忠忠忠義の由来」、カラスは「孝孝孝行息子」ということを思い出しました。そして一人子を手放している親のことが身にしみて、東に向かつて手を合わせて、日本一の孝行娘になりますと誓ったことを思い出します。家から二十里もはなれているというので、ふる里という言葉も故郷という字も私のためにあるような気がしました。

夕食後の散歩時間は庭のあちこちに二、三人で唱歌のけいこでした。だれともなくうたいだすのは故郷のうた、「夕空晴れて秋風吹く月影落ちて鈴虫なく」までは、かわいらしい声をはりあげているが、それから次第にさびしそうな声になり、「ああ我が父はいかにおわす」と来た時は皆ポロポロと流れる涙をおさえて無言になったのを覚えております。次によくうたったのは烈女松江のうた、これをうたう時は真剣に自分を教訓する気持ちでした。歌詞はともに入って、「乙女あり」「姿は句う春の花」「心は清き秋の月」あの時の感傷的な気持ちは、もしかしらた皆自分自身をあの文句に似通わせていたのかもと、今この年になって思い出し、乙女時代の無邪気さはずかしいようなかわい

いような感じでひとり笑わされます。も一つ歌で印象に残っているのは「美しき天然」です。近頃一流歌手のをきいても何の感興も湧いてきません。あの本館前の桜の下でうたったり聞いたりしたあの歌をあの声を今一度と、なつかしく思ってみても、ただ耳の底に残っている声を、感じを追ってみるばかり、録音機もテープもなかった七十年の昔がうらめしい。

冬と春の休みは、陸路で宇摩郡の団体に加わって、七十年昔の桜三里を、白木の菌のついた下駄、白木錦小倉のはな緒で、男子部先輩に追いつき追いつき日が暮れて、小松の定宿に着いて、明日のわが家を楽しんでマドロムということをして三年間くりかえしました。この短い休みに、往復に四日の日数を費やすことは取り返しのない惜しい日数でありましたが、今はなつかしい思い出となりました。「ここはお国の何百里」の戦友のうたで桜三里をコダマさせた声が聞こえて来ます。

この私、旧宇摩地方の女子部出の、ただ一人の生き残り者になりました。土居町小林に芽生えて、九十年近く根を下して、九人の子女のふる里を守って、次の白寿百才まではとがんばっております。

忘れ得ぬ恩師

愛媛県女子師範学校

松本真須子氏 寄稿

(大正九年卒)

全員寮生活のせいにか、三津女子師範学校の思い出は深くなつかしい。ことに舎監の先生は慈母のようになされた。中でも徳久よね先生は忘れようとしても忘れることはできません。盲目編の筒袖にインク色の袴を長くひるがえす色黒い先生だった。奈良女高師新卒の若さを以て、私たち一年生に熱情を以て教導されました。教室では、国語習字を受け持ち、級主任のうえ舎監も務められました。今思えば定めし激務であつたと思います。

大きな丸い目を虚空に据え、恍惚として教材に憧れるような口調で透徹した教え方であつた。一語一句心に刻み込まれた。大きな手で一人一人毛筆の運びを教えられ、二十枚の清書を強いられて泡をふいたことも、今はただ感謝です。文字・絵画・誌歌・文字等、まれに見るすぐれた先生でした。薄暗い舎監室で、細かい刺繍をしながら、「この美しさをごらん、上手でしょう。」と満面に笑みを湛えて自慢された天真な童顔が今も見えるようです。告別式にも泣いたし、見送りの時は泣き声で追いか



け、幼児が母を呼ぶように縋って先生を困らせました。今でも我ら九回生は、故徳久先生を讃え、毎年クラス会には遺墨を床に飾り、守り本尊のように御軸に見入るのです。淡く美しい彩色、綿密な筆致、秋の深山に引き込まれるような幽寂な大作です。クラス会員十五名は今さらのように、先生の巾広い御趣味と技量に感嘆して人徳を慕っています。一別以来、ついにお目もじ出来ず、故人となられました。池田のぶさんの御尽力で遺墨を受けたことがせめてもの御縁かとうれしく思います。

忘れ得ぬ恩師はたくさんあります。修学旅行中しんげん袋を忘れて草野先生を困らせたり、たびたび病気で慈母のような田中先生におせわをかけたたり、穴があれば入りたいような思いです。先生方が今も、もの言いかけてくださる気がします。上品な植村先生の黒板画の美しく巧みであったこと、端正厳格な麻生先生、重厚で蘊蓄のある葛西先生、等々お懐かしい先生の面影が後先なく浮かんで消えていきます。

長い四か年三津の学びやに青春を暮らし、旧師に友にと深い温情を受けましたことも五〇有余年の昔ですが、別れの時は泣きましました。堂内にすすり泣きが起こりました。ともあれ泣き虫でした。当世の高校卒等のあつさりした別れ

などとは隔世の感があります。不自由不便貧弱な学舎の中で、外柔・内剛という女性教育の目標、真・善・美・聖、の火に向かって努力した昔を尊いものと思います。すなおに献身する教職を天職と教えられ、陛下のおおみ宝、日本の子宝を教育することの尊さを身につけました。汚職・スト・ゲバ・ハイジャック等の言葉は、全く不要でした。デモクラシーがちよつぱり顔を出していたころかと思えます。

愛大元年

愛媛大学教育学部
兵頭 清見氏 寄稿
(昭和二十六年卒)

「テンプラ大学生」、口の悪い教授がこう諷刺した。角帽に詰めえり、革カバンを下げて外づらだけ大学生のかっこうをしたサボリ学生に与えた痛烈な皮肉であった。

昭和二十三年私どもは愛媛師範・愛媛青年師範・松山高등학교・新居浜工専(旧)に分かれて入学した。それが最後の旧高専入学生であった。当時はバンカラ流行時代、「国敗れて山河あり」「新しい日本は我々が……」と多感な青春

を謳歌し、頹廢の世情に反骨を示した私どもの粹な？スタイルであった。幣衣破帽、ニシメ手拭いを腰に下げて電車に乗る。一番町で降りてまず古本屋をあさる。安いが気に入った専門書一冊を手にして、ゆうゆうとして大街道を闊歩したものである。

翌二十四年学制改革によって愛媛大学が誕生。文理・教育・工の三学部で発足、私どもは再び受験しての愛大一期生となった。学部により多少の違いはあったが、二倍程度の競争率で今から考えると広き門であった。初代学長は藤本萬治先生、教育学部長は井上宮久先生であった。バンカラからジェントルマンへの脱皮は、まず服装革命から始まる。蛇腹の丸帽は角帽に、ホウ歯の下駄は革靴に、肩まで伸びた放髪はバッサリ刈り落とした。新しい大学は夏草茂る旧城北練兵場跡のバラック校舎をそのま、使用した。わずかにコンクリートの校門ができたのと、木造で本館を増築しただけの粗末なキャンパスであった。それでも創成期の愛大にかけれる私どもの意気は盛んで、まず自治組織を作った。古谷君が初代の自治委員長、私と伊藤君が副委員長に選ばれた。今と違って当時は過激な学生運動もなく、おだやかな活動に終始した。旧愛師・青師における家族的なムード派とイデオロギーに基づ

く運動派とが奇妙にとけ合って混在した時代である。教授と学生の間にも、良い意味での師弟の血が通っていた。元氣のあるヤツが「先生の話は眠とうていけん、もつと気合いを入れて講義して下さい」と注文すると「眠ってもよいですよ。あとで家へ帰ってから勉強しときなさいや。」と軽いなされたり、一人で四人分も代返するヤツがいて皆がクス／＼笑いだすと、教授もニンマリして「もう少しアクセントを変えたほうがよいですよ。」と忠告したり、オーバーに長靴、ポケットに手をつっこんだま、二時間ぶつとおして講義して、終わりがちよこんと出した手にチョークが一本にぎられていた教授など、人間味とユーモアのある師弟関係がくり広げられていた。先年亡くなられたが、東大と京大の二つを出て博識とバイタリティー有名な内川勇教授の講義はこわかった。「おれの講義が気に入らんヤツや、よそ見、むだ話のしたいヤツは教室を出ろ」とどなられた。

「教師は一教えるために十のことを学べ、学問とは徹することだ。教師が徹すれば生徒は自ら学ぶ。」と訓された。なかに勇敢なヤツがいて教室の一番後で腰かけを三つならべてねそべっている。「おれは単位が欲しいだけだ」と言って、生物の講義を聞きながら、ニイ

チエを読みふけている。これもある意味で学に徹したものといえる。

かくて二十数年、今では法文・教育・理・工・農・医学をもち、堂々たる地方総合大学の雄となった。かつて私どもが夏草にむれて寝ころんだ広いキャンパスは美しく整備され、芝生や樹木が静かな思索の世界をかもしだしている。

「学を究むるに冷静、学を貫ぬくには情熱を以てせよ」という。愛媛大学はまさに「学を究める場」にふさわしい成長をとげてきた。ともすれば現代人の見失いがちな冷静な眼と情熱の心をいつまでも保ち、かつ呼びさましてくれる学問の府がこゝにある。この門に立ち、この門を出でて二十五年、ひたすらに教職ひとすじに歩んで来たつもりでいたが、省みて学ぶことの浅かったことを嘆じ、愛大元年がつい先日のことのように思えてならないのである。

※ 愛媛大学教育学部は昭和五十一年に百周年記念事業を実施しました。



会員の声

「教行信証」と鈴木大拙



吉原 宏文

(昭四二卒)

私は、目下の急務として鈴木大拙博士の英訳による親鸞聖人の「教行信証」の研究に没頭している。同窓会報にその英訳本から会得したことを投稿し、次第にその理解が深まっていると確信している。しかし同時に、その訳の背景も説明しておかなければならないと感じてきた。

鈴木は明治三年（一八七〇）、金沢に生まれる。同二十四年（一八九四）上京後、円覚寺の今北洪川、釈宗演について参禅、翌年東大選科に入り、仏教関係の著作を英訳刊行、大正十年（一九二一）、「終生無二の友」西田幾多郎の勧めで大谷大学の教授

訳を託されて実行したのか、それは私の今後の研究課題であり、今は、ここに止めるしかない。

さて、鈴木は、初版本と再版本と二回出版された。初版本は、既に入手不可能であり、私が今手にしているのは、平成二十三年（二〇一一）の再版本である。その再版本の編集上の序文を任されたのが、名古屋出身の真宗大谷派の碩学・前田専学博士（東京大学名誉教授）である。私は、彼の美事な英文を和訳してその由来を訊ねてみたい。

「教行信証」の英訳は、真宗大谷派の長官であるホーガン宮谷によつて、昭和三十一年（一九五六）、当時、大谷大学教授で、コロンビア大学の客員教授としてニューヨークに居住していた鈴木に送られた一通の手紙によつてその端緒が開かれた。この手紙の中で、宮谷は、親鸞の死の七百周年の記念に間に合つて英訳を完成するように、鈴木に依頼した。鈴木はこの時、既に八十六歳の高齢であったが、次のような返事を送った。

「教行信証」の英訳は確かに必

要です。また、それに関連して真宗の教義を普及する本も必要です。正直のところ、今日の仏教界を見渡しても、經典の英語翻訳となると、私の他に、誰も適任者はいないように思われます。私は、故ゲッショウ佐々木の友情に恩義を感じています。だから、何とかして助けたい。私は自分の思考力が弱まったとは思いません。しかし、根気と記憶力は衰えました。参考のため、「教行信証」のコピーを送つて下さい。私は種々の専門用語に適切な考察を与えてみたい。漢字の「教・行・信」という表題に注目しただけでも、「教」は一先ず脇に置いて、まだ「行」の適切な英訳はありません。そして、「信」は差し当つて、普通の文字で表記される通りでよい。しかし、「証」になると、これもまたじっくりと吟味する必要があると思います。私は、今までに使われないずれの訳にも満足していません。また、「願」についてのよい訳も見当りません。誰でも一旦、このようなことを考えはじめると、問題は容易ではないのです……

（真宗九月号、昭和三十一年

（一九五六、四頁）
この引用文は、専門用語についての鈴木の内帳面さと彼の訳業の独特の姿勢をよく例示していると思う。我々が確定することができると、鈴木は八十九歳で「教行信証」の最初の二章（真実の教と真実の行）の英訳に着手した。そして、九十歳でその草稿の英訳を完成し、九十一歳で、次の二章（真実の信と真実の証）の英訳に取りかかった。そして、約一ヶ月で草稿の訳を完成し、おそらく、九十二歳の時序文を書き始めた。しかし残念ながら、昭和四十一年（一九六六）七月十二日の早朝、腸間膜の動脈血栓症の突然の発作によつて、東京の聖ロカ病院で亡くなった。享年九十六歳であった。こうして、英訳と彼の序文がまだ編集され校訂されている最中亡くなったので、鈴木本人も昭和四十八年（一九七三）の自分の翻訳の完成本を見ることはできなかった。従つて、ついに東方仏教協会の編集者として、目を光らせていた西谷啓治の尽力で出版された。

しかしながら、この初版本はも

はや手に入れることはできない。それは、昭和三十六年（一九六一）の親鸞の死の七百周年に当たる企画として予定され、結局、昭和四十八年（一九七三）に発行された。それから、五十年が経過し、平成二十三年（二〇一一）は親鸞の死の七百五十周年に当たるとともに、親鸞生誕八百周年となる。この驚くべき偶然の一致によつて、この重要な行事を記念するために、真宗大谷派は「教行信証」の板東写本（国宝）の完全な写真・複製を発行する計画を立て、同時に、「教行信証」の鈴木英訳を再発行しようという企画が、東京の真宗学センターの会長弘之本田師によつて平成十七年（二〇〇五）の二月ごろ開始された。そして、彼と同センターの事務責任者エイシン・ハセオカの二人が、中国のTripitaka（三蔵即ち、経蔵・律蔵・論蔵）の英訳の編集委員会の議長であつた私の能力を見抜いて、仏教伝道協会を監督する編集者の地位を引き受けるように訪ねてきた。私は、目標を成就したいという彼らの情熱と能力に逆らうことができなかった。

また当時、大谷派の重要な管理者ソーエ熊谷本人からも直接依頼され、六月二十一日、再発行に目を光らせる役目を受諾した。これに先立って、三月十日に、版權所有者と種々の準備作業が完了したので、「出版契約の結論のための覚書」が、大谷派と松ヶ岡文庫財団との間で署名された。そして、その最初の編集会議が、真宗学センターで、平成十七年（二〇〇五）八月十日に開催された。その際、基本的編集方針に関して、次の三点が合意された。

- 一、鈴木英訳のいかなる修正と変更も最小限に保つべきこと
- 二、再出版本は、それを海外に広める意図で、学部学生と大学院生を対象とすること。
- 三、編集過程を完成させるため、二年の猶予期間を取つておくこと。

以上、前田博士の序文を和訳した。さて、私は、この再版本を、京都大学名誉教授で、大谷大学でも教鞭をとられた荒牧典俊先生から勧められ、高価ではあつたが二冊

購入した。一冊はイギリスの心友 Judith Rouse さんに送った。もちろん彼女はクリスチャンであるが、鈴木英訳の概念の骨格（特に、阿弥陀仏の「回向」）がキリスト教とよく似ているので、それに魅了されながら一生懸命読んでいたという返事をもらった。少しこのことに触れてみたい。すなわち、我々人間は有限であり、阿弥陀仏は永遠である。我々は日常生活において、自分の肉体存在を「自己」と想い、客観と主観に二元化し、その範疇的存在として外なるものを自分と想い、存在そのものの、すなわち真の自己を忘却している。真実であり、誠実であることは存在の全体を投げ捨てること、死することによつて生きること、十字架にかけられ、そして復活すること。これは我々人間が経験することができる存在の最も不思議な神秘性であり、阿弥陀仏が衆生に向つて侵入してくるのである。親鸞は、その和讃に、「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨を碎きても謝すべし」と。また、「真実信心の称名は弥陀回向の法なれ

ば不回向となづけてぞ、自力の称念きらわるる」と詠まれた。

次に、この再版本のカバーに載っている二編の書評を紹介したい。

一、一人の禅の達人として周知の、鈴木大拙は、また、浄土真宗に対しても好意的である。鈴木最後の仕事は、真宗の開祖・親鸞による深遠な宗教哲学的著作「教行信証」の英訳であつた。それは、彼の思索の真髓で満たされている。再新刊本は、「親鸞と鈴木」という二人の日本仏教の偉大な師匠の、時間を超えた驚くべき遭遇の最終版を構成する。

二、鈴木英訳の「教行信証」の英訳は、親鸞の仏教的伝統の革新的理解の窓であるだけでなく、鈴木英訳の革新的理解への窓でもある。紋切り型の解釈を離れて、鈴木英訳は親鸞に、シヨツクを与えるような新しい読み方を吹き込む。即ち、阿弥陀仏の「本願（根源の誓い）」は、「根源の祈り」になる。そして、「行（宗教的実践）」は、「立ち

上がって生きていくこと」になる。西洋人は時々、鈴木英訳は、標準的で正統的な親鸞の紹介であると誤解している。そうではない。むしろ、仏教が、現代世界の人々にとって説得力があり、その心を奪つてしまうような宗教であるとする、鈴木英訳の決意によつて、駆り立てられるのである。

こうして、親鸞の「教行信証」は、大乘仏教の山嶺として、ますますその光芒を強めるのである。

最後に、人類初の核爆弾を落とされた広島市の平和の祈りの日が、今年もまた巡つて来た。世界平和、究極の平和（涅槃）を祈りつつ、被爆被害と闘いながら生きている一人として、私は今、「教行信証」を読み解いている。

二〇二〇年（令和二年）八月六日（木）
広島被爆七十五周年記念式典の日
（同時に、コロナ禍の夜明けを信じて）

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇二一年四月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二〇年十一月二十六日(木)～
二〇二一年三月十六日(火)

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げております。
お気軽に**愛媛学習センター**までご請求下さい。



放送大学



教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2021年度4月入学生募集中！

(2021年3月16日まで)

問合せ先 **愛媛学習センター**

TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル

放送大学 www.ouj.ac.jp



0120-864-600

愛媛大学ミュージアムから



愛媛大学ミュージアムでは、11月16日(月)から原則として学内者を対象に開館を再開したところですが、全国的に新型コロナウイルスの感染拡大が続き、愛媛県でも11月20日(金)付で警戒レベルが「感染警戒期」に引き上げられ、本学(城北キャンパス)でも同日付で警戒レベル2(イエローステージ)に引き上げられたことを受け、11月21日(土)より再び臨時休館とさせていただきます。

ご来場を予定されていた皆様や、当該期間の展示にご協力いただいた皆様には、ご迷惑をおかけいたしますが、事情をご賢察いただき、なにとぞご理解くださいますよう、お願い申し上げます。

なお、開館につきましては、新型コロナウイルスへの感染リスクに関する状況を見極めながら、改めてお知らせいたします。



部活動紹介

愛媛大学俳句研究会



私たち、愛媛大学俳句研究会は、現在二十名を超える部員数で活動しています。当初は新型コロナウイルスの影響によって新入生が入部してくれるかどうか不安があつたものの、令和二年十一月末現在、三人の新入部員を迎えることができました。

俳句研究会は本来ならば毎週火曜日に句会を行い、毎月一回は動物園などを訪れ俳句を作る吟行会も行っていました。これらもコロナウイルスの影響で行うことができませんでした。しかし、ネット句会やzoom句会を新たに立ち上げることで、直接顔を合わせる

ことはできないものの、毎週の句会を途絶えさせることなく継続することができました。

俳句は一人で作ることもできるものでありますが、部屋にこもって一人で作り続けるとどうしても独りよがりの俳句しかできなくなってしまう。句会を開き部員同士で鑑賞しあうからこそ、新しく見えてくる発見や、俳句の面白さがあるのです。俳句研究会はこういった、互いに俳句を鑑賞しあうという活動に特に力を入れています。面と向かって気持ちを伝えあ

うことが難しい今のような情勢の中でこそ、季語というみんなが心の中に共有しているものを通して感情を伝え合うことができます。俳句の持っている力を感じています。

- メールアドレス
aidai.haikuken@gmail.com
- Twitter
@Aidai_Haiku

部員作品

模造紙いっぱい「なぜ朝顔は種を残す」

唇のほくろに触れて冬の月

水蜜桃咲かないもはや少女でない

エンドロール鯨はいつせいに動く

滴りのなほ言霊のあるごとく

待春のかさぶたすこし残る膝

パンジー突き出す決闘書のごとし

青野より青野の孤独見ておりぬ

つぶあんを推す名店や秋の晴

預かったものばかりなり秋の暮

神主の一振り初雪の匂い

逆剥けの坂向けており寒椿

幽霊や合鍵渡す今夜来い

友達の友達もいて日向ぼこ

校庭の朝顔支柱より枯れる

踏青の足の大きくなつてゆく

辰砂

あゆ

真綾

奈々美

幽慶

柚乃

瑠璃

鈴谷

純嶸

高安

湮蜩

舞蹴

浮雲

草笛

真巳

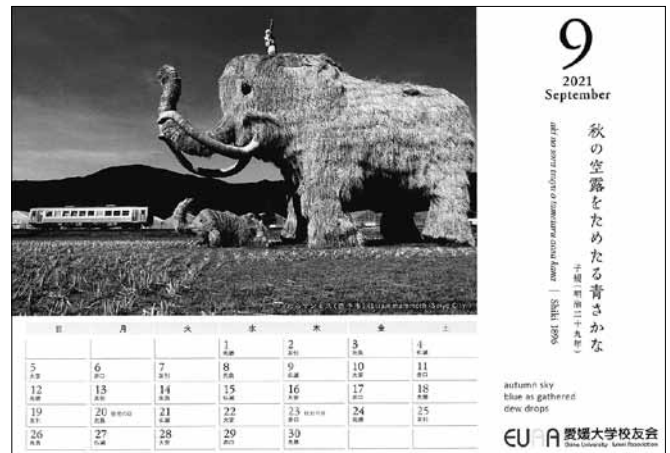
群想

愛媛大学

校友会ニュース

【子規俳句カレンダー作成】

校友会では、愛媛大学や四国、松山の風景などの写真に、郷土が誇る俳人正岡子規の俳句を載せて卓上サイズのカレンダーを作成しています。校友会に会員情報をご登録いただいた卒業生で、校友会ホームページから応募いただいた皆様には先着でプレゼントしております。2021版を少しご紹介いたします。



会報の送料納付

について

会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までと

し、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四

送り先 ☎七九〇一八五七七

松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれてください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。

02	私 込 取 扱 票	通常私込料金 加入者負担
016407	2754	金額
愛媛大学教育学部同窓会		料金
☐ 同窓会懇親会会費 ☐ 会報送料 ☐ 寄付 () 年 卒		備考
振替口座番号 〇一六四〇一七二七五四		日 月 年
振替用紙に貼付してください 振替の注意事項をお読みください。(ゆうちょ銀行) 以下より詳細は説明も記入してください		様 印

用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒に皆さんでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていない用紙になります。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

【お知らせ】

第十八回教育学部同窓会懇親会
期日：令和四年〇月〇日
場所：ANAクラウンプラザホテル松山

敬 弔

(物故会員)



(死亡年月日)	(氏 名)										
1・2・5	古田 通 (昭23・愛 師)	2・5・19	清水 輝孝 (昭33・愛 大)	2・9・1	上甲 和子 (昭31・愛 大)	2・8・18	大西 敏秀 (昭31・愛 大)				
1・9・10	上田 幸恵 (昭20・愛 師女)	2・6・3	向井 義章 (昭17・青 年)	2・10・22	武智 理子 (昭23・愛 師女)	2・10・26	渡邊 孝生 (昭29・愛 大)				
1・11・13	山本 茂弘 (昭18・愛 師)	2・6・23	村上 哲惟 (昭32・愛 大)	2・10・26	渡邊 孝生 (昭29・愛 大)	2・10・26	渡邊 孝生 (昭29・愛 大)				
2・3・8	藤田 昭代 (昭25・愛 師)	2・7・14	河野 雅行 (昭37・愛 大)	2・10・26	上野 和文 (昭32・愛 大)	2・10・26	上野 和文 (昭32・愛 大)				
2・3・23	山口 芳江 (昭27・愛 大)	2・7・17	稲垣 健治 (昭30・愛 大)	2・10・30	藤原 昭二 (昭23・愛 師)	2・10・30	藤原 昭二 (昭23・愛 師)				
2・4・25	西部 哲 (昭24・愛 大)	2・7・19	寺川 秀實 (昭27・愛 大)	2・11・3	鎌田リヨコ (昭24・愛 大研)	2・11・3	鎌田リヨコ (昭24・愛 大研)				
2・4・29	松下 志郎 (昭47・愛 大)	2・7・20	相原 俊雄 (昭28・愛 大)	2・11・6	神野 弘良 (昭34・愛 大)	2・11・6	神野 弘良 (昭34・愛 大)				
2・5・1	高橋 元彦 (昭36・愛 大)	2・7・27	矢野 忍 (昭16・愛 師)	2・11・8	鈴木 太郎 (昭25・愛 大)	2・11・8	鈴木 太郎 (昭25・愛 大)				
2・5・4	井上 勝美 (昭29・愛 大)	2・8・9	近藤 三太 (昭29・愛 大)	2・11・11	山内 良正 (昭25・愛 師)	2・11・11	山内 良正 (昭25・愛 師)				

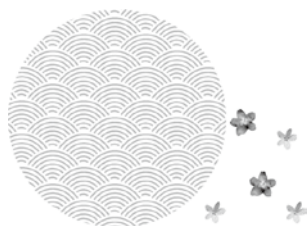
寄付者名

令和2年

7月～11月

柴田 教市 様
前田 和美 様
藤井 きみ子 様
大星 通 様
森岡 昭 様
田坂 正教 様
兵頭 照子 様
高橋 綾子 様
久保 充清 様
酒井 博司 様
日野 厚生 様
川井 正生 様
白石 衛 様
竹田 敏行 様
塩梅 陽一 様
渡部 美智子 様
藤原 謙一 様
二宮 寿美子 様
兄玉 良一 様
城恭 子 様
久保木 道子 様
井上 博樹 様
森岡 春夫 様

※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます
いたします



西山 博 様

教育功労

蔵田 満隆 様

教育功労

石丸 正 様

教育功労

秋の叙勲
☆瑞宝双光章

(令和二年十一月三日)

祝・叙勲



会員写真館



会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。
それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写
真を事務局にお送りください。
写真送付先：dosokaied.ehime@gmail.com

山里の冬景色を求めて歩いていると、民家の軒先水切り、湧き水の滴る山肌、小川のほとりの水溜りなどで氷の造形に出会いました。

写真提供：山下 雅司（昭和32年卒）



軒先ののれん



仙人の祈り



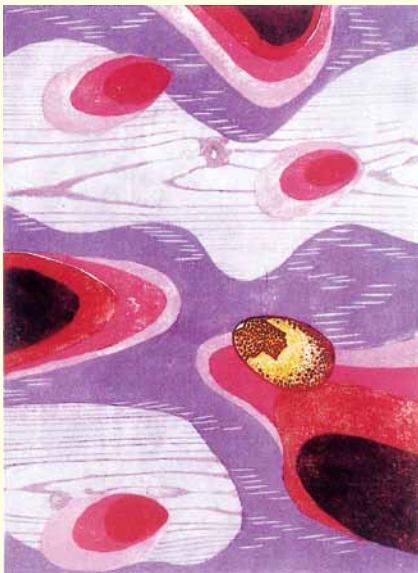
水溜りの紋様

文芸欄

版画「川井正の世界」パート2

版画作品は、水彩画や油絵等とは違った表現の良さがあります。今回は会報129号掲載で好評をいただいた川井様の作品をパート2として掲載いたしました。

川井正作品集より抜粋



誕生



残したいこの町並み



内子の町並み